

大学の図書館 第41巻第12号 (No.589)

2022 12

大学図書館研究会第53回全国大会記録

2022年9月17日(土)～19日(月・祝)
(オンライン開催)



目次

第53回全国大会のまとめとして	178
会員総会記録	180
研究発表(発表要旨)	185
記念講演(概要報告)	186
課題別分科会	187
(1) 大学図書館史	(5) 学術情報基盤
(2) 利用者支援	(6) 図書館経営
(3) 資料保存	(7) 図書館建築・デザイン
(4) キャリア形成	(8) 出版・流通
協賛企業プレゼンテーション	197
シンポジウム「[司書]養成の現在地」	197
自主企画	198
交流会	199
協賛企業・団体一覧	201
第53回全国大会 会員総会資料	202
第53回全国大会 決算報告	237
大会運営役員名簿	238
大会参加申込者名簿	239
お詫びと訂正『大学の図書館』2022年10月号	240

第53回全国大会のまとめとして
常任委員会

第53回大学図書館研究会全国大会は、2022年9月17日（土）から9月19日（月）の3日間、オンライン会議システムZoomを用いて開催されました。参加者は137名となり、盛況のうちに終了しました。

新型コロナウイルス感染症対策もあり、今回もオンラインでの開催を断念し、全面オンラインで開催しました。

第52回全国大会に引き続き、オンライン会議システムに習熟することを目的のひとつとして、Zoomを用いたオンライン交流会を2月に1回程度、合計3回開催しました。

前回に引き続き、実行委員会形式での運営となりましたが、全国大会実行委員長の山口友里子さん、副実行委員長の赤澤久弥さんには大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。

今回は、全国大会1日目に会員総会・研究発表・記念講演及び交流会を、2日目に8つの課題別分科会を、3日目にシンポジウムを開催しました。また、自主企画を2日目夜・3日目終了後に開催しました。

会員総会は、第52期（2021/2022年度）の活動報告・決算報告・会計監査報告について報告があり、審議の結果承認されました。続けて、第53期（2022/2023年度）の活動計画案・予算案・役員案について審議され、承認されました。また、「大学図書館研究会の会則改正に係る修正案」、「大学図書館研究会出版物の取扱い」も、審議の結果、承認されました。

研究発表は、相場洋子さんによる「What about the Humanities? COVID-19のオープンアクセスへの影響と人文社会科学の未来について」の発表があり、活発な質疑応答が行われました。

記念講演は、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構の三中信宏氏による「読書による知識の体系化 -- 分類・系統・アブダクション」があり、『知識の体系化』、「部分から全体への推論」すなわち「アブダクション」という知的行為について、興味深い講演がありました。

また、初めて大学図書館研究会の全国大会に参加される方向けに、「ウェルカムガイダンス」を2回開催し、計28名の参加がありました。

2日目の午前は、大学図書館史、利用者支援、資料保存、キャリア形成の4つ、午後は、学術情報基盤、図書館経営、図書館建築・デザイン、出版・流通の4つ、計8つの分科会を開催しました。会員が講師を務めたり、参加者同士で活発な議論が行われたりするなど、主体的な参加が目立ちました。

3日目のシンポジウムは、「『司書』養成の現在地」が開催されました。前半は、都留文科大学の日向良和教授、東北大学附属図書館の佐藤初美総務課長から、それぞれ「司書養成の現状 図書館を取り巻く社会の変化をふまえて」、「大学図書館の現場における職員養成の現状と課題」についてご講演をいただき、後半は郡山女子大学短期大学部の和知剛さんのコーディネイトの下、ディスカッションを行いました。参加者は71名で、フロアからの非常に多くの質問の応答、登壇者間の相互質問等の議論が行われました。

自主企画は、2日目夜に、恒例「地酒の会拡大版」を、3日目午後「絵本・読み聞かせの会」、合計2つが開催され、「地酒の会拡大版」は26名、「絵本・読み聞かせの会」は17名の参加者がありました。

前回に引き続き、2日目昼に、企業協賛企画として「協賛企業プレゼンテーション」を開催し、日本事務器株式会社様による「学習支援のための文献レビューアプリBOOK MARRY」、株式会社カーリル様による「カー

リルの最新情報2022」、株式会社ネットアドバンス様による「ジャパンナレッジLibアップデート」のプレゼンテーションがありました。

さいごになりましたが、今回の全国大会開催にあたっては、NPO医学中央雑誌刊行会、株式会社カーリル、株式会社カルチャー・ジャパン、株式会社紀伊國屋書店、株式会社規文堂、株式会社サンメディア、株式会社シー・エム・エス、株式会社樹村房、株式会社ソフエル、日外アソシエーツ株式会社、日本事務器株式会社、日本ファイリング株式会社、株式会社ネットアドバンス、有限会社藤井洋書、丸善雄松堂株式会社、株式会社メタ・インフォ、の各社様にご協賛いただきました。大学図書館研究会の研究活動をお支え下さり、心より御礼申し上げます。

来年の全国大会の開催形態は検討中ですが、また、みなさまにお会いできることを楽しみにしております。

大学図書館研究会第53回全国大会

会員総会記録

日時：2022年9月17日（土）13:00～15:15

■大会開会宣言：上村事務局長

挨拶：呑海会長

挨拶：山口全国大会実行委員長

会員追悼

物故者：大石博昭氏

追悼の言葉：小野亘氏（東京地域グループ）

会員総会開会

議長選出

立候補なし

事務局推薦（挙手にて承認）

渡邊さよ氏（広島地域グループ）

坂本里栄氏（九州地域グループ）

◆第1号議案

第52期（2021/2022年度）活動報告

- ・活動日誌
- ・地域グループ報告
- ・研究グループ報告
- ・常任委員会等報告（常任委員会）
- ・ワーキンググループ報告
- ・事務局活動報告

（質疑）質問なし

（採決）承認

◆第2号議案

第52期（2021/2022年度）決算報告・会計監査報告

上村事務局長から、以下の補足説明があった。

- ・2021/2022年度一般財政決算報告：印刷・

発送委託・通信費の支出の決算額が予算額を上回っているのは、会報2021年6～12月号の印刷・発送委託・通信費の支払いを、出版財政でなく、一般財政からの支出としたためである（これに伴い、2021/2022年度出版財政の支出は、決算の印刷・発送委託・通信費の決算額は予算額を下回っている）。

- ・2021/2022年度五十周年事業基金：記念出版物編集作業の停滞、海外図書館研修ツアーの中止により、予算の執行はなかった。
- ・2021/2022年度会計監査報告（伊賀由紀子会計監査人）

（質疑）質問なし

（採決）承認

◆第5号議案

第53期（2022/2023年度）役員案

呑海会長から、役員案（全国委員、会計監査）、常任委員候補者が提示され、上村事務局長から全国委員の交代案について、補足説明があった。

新任候補となる全国委員候補3名、常任委員候補1名から挨拶があった。会計監査候補者は欠席。

会員総会中の立候補はなかった。

（質問・意見）（以下敬称略）

- ・森藤（兵庫地域グループ）

常任委員候補はどなたが推薦するのか。

→慣例的に常任委員が推薦し、全国委員にも照会している。先ほどの常任委員候補の提示の際に説明が不足したが、常任委

員は全国委員であり、全国委員の中に常任委員を担当する委員がいるということになる（呑海会長）。

常任委員は、地域グループから推薦の全国委員と別枠と考えてよいのか。

→全国委員は、地域グループ推薦の全国委員と、常任委員候補の全国委員に分かれている。常任委員は、地域グループから推薦の全国委員とは別枠であるが、今回ご指摘いただいたので、常任委員候補者について、事前に地域グループに伝えることについて検討したい（呑海会長）。

常任委員候補の決め方について会則やウェブサイトを参照したのだから分かりづらかったので、質問させていただいた。

（採決）承認

休憩 13:50～14:05

休憩中、第53期（2022/2023年度）第1回全国委員会開催

第1回全国委員会報告

（1）会長・副会長・事務局長選出

会長：呑海沙織

副会長：赤澤久弥

事務局長：上村順一

（2）来年度の全国大会について

呑海会長から、状況を見ながら、対面やハイブリッド開催も視野に入れつつ、今後、考えていくとの報告があった。

（3）会長・副会長・事務局長挨拶

◆第3号議案

第53期（2022/2023年度）活動計画案

・常任委員会

呑海会長から、原則として、第53期と同様の回数の開催とし、基本的にオンラインの会議とすること、特定常任委員、運営サポート会員の協力を得ながら滞りなく運営

していくことについて報告があった。

・ワーキンググループ

・事務局

上村事務局長から、活動を円滑に進めるためには、会員の数が必要であるため、会員勧誘の進め方を考えていきたいとの発言があった。

（質疑）質問なし

（採決）承認

◆第4号議案

第53期（2022/2023年度）予算案

上村事務局長から、以下の補足説明があった。

・2022/2023年度一般財政予算案：（収入）会費予算が前年度より減額となっており、会員の皆様には新会員の加入にご協力いただきたい。雑収入が昨年度と比較して増額となっているのは、旧埼玉地域グループからグループ費残額の寄附の申し出があり、常任委員会、全国委員会での審議を経て、雑収入に組み入れることとなったためである。

（支出）通信費は、オンライン会議の増加への対応として増額となっている。

・2022/2023年度大会基金：来年度大会会計への支出は、ハイブリッド開催の可能性を考慮して増額とした。

・2022/2023年度五十周年事業基金予算案：記念出版物編集のための予算を計上しており、今年度は、出版のめどをつけたい。

（質問・意見）

・柿原（九州地域グループ）

五十周年事業記念出版物の編集は、現在どのような状況なのか。

→記念出版物に掲載する原稿のうち、各支部・地域グループの委員組織の変遷の一覧表、各地域・研究グループの活動の歴

史の紹介文は、各地域・研究グループから提出していただいている。その他、大図研の沿革に関する文章、記録資料の作成が必要であるが、新型コロナウイルス感染症拡大により、会報のバックナンバーを所蔵館にて閲覧することができないため作業が進んでおらず、今年度への持ち越しとなった（北川五十周年事業記念出版物編集委員長）。

(採決) 承認

◆大学図書館研究会の会則改正に係る修正案
呑海会長から、昨年度（2021/2022年度）の第52回会員総会で承認された会則改正に関して、第52回会員総会中に、以下、①～③の3点の修正提案があったとの確認があり、3点について、全国委員会で修正提案どおりに修正すべきとの決議がなされたので、再度審議を願いたいとの説明があった。

①附則文言の修正

②会長の設置規定の記述位置修正

③本文中の「より」「から」の用法修正

①については、改正会則の施行日と適用日とを明記して、本日（2022年9月17日）を改正日として加筆すること、②については、会長の設置規定の位置を適切にするために、会長設置規定を、全国委員会、常任委員会、会員総会の規定の前に移動すること、③については、用法に従って修正することを提案している。

(質疑)

・山下（九州地域グループ）

昨年度承認された改正案への修正であるので、施行日は、本日（2022年9月17日）でなく2021年9月18日、改正日は本日ということではよろしいでしょうか。

→施行日と運用日が同じであるので附則に加筆はせず、改正日は明確にした方がよ

いので、本日を改正日とした（呑海会長）。

(採決) 承認

◆大学図書館研究会出版物の取扱い（案）

呑海会長から、大学図書館研究会出版物の団体（図書館、書店等）への販売を委託するにあたり、委託に過剰なコストをかけないことを目的とした出版物販売の見直し、簡素化に関して、全国委員会にて承認された以下の案について説明があった。

・会報『大学の図書館』については、「始期1月－終期12月」と「前払い【もしくは/及び】後払い」を満たす団体に限り、有償頒布する。

・会誌『大学図書館研究会誌』は、発行後、即時オープンアクセスとすることとし、団体への販売はしない。

なお、会報について、現状（2022年7月末日現在）では、有償頒布する総件数152件のうち、12件が販売対象外となるとの補足もなされた。

(質疑)

・松川（大阪地域グループ）

販売対象外となる12件の内訳を教えてください。司書課程をもつ大学であるとか、先端的なサービスを提供している図書館であるかだけをお聞きかせいただきたい。概要として、ご存じの範囲で教えてください。

→12件の内訳はすぐには分からない。大学図書館のほか、若干の県立図書館、専門図書館、書店が、「始期4月－終期3月」で契約している（市村運営サポート会員）。

→現在の出版部担当の和光大学は、各購読団体の事情に応じて、細やかな対応をしてくださっている。今後の販売体制の維持のためには販売を委託せざるを得ず、

簡素化が必要となる。販売対象外となる12の団体には、契約の変更が必要である事情を説明して、できるだけ購読を継続していただけるよう相談したい（呑海会長）。

- ・有馬（兵庫地域グループ）
「前払い {もしくは/及び} 後払い」を案としているが、「前払いのみ」あるいは「後払いのみ」とした場合のコストも考慮した上で案であるのか。
→「前払いのみ」、「後払いのみ」については考慮していない。現案の販売対象外12件以外に購読対象外が生じることは大幅な購読減少となり、また、複数のケースのコスト算出には労力がかかる（呑海会長）。

（採決）承認

◆その他

（来年度の全国大会の会場について）

- ・松川（大阪地域グループ）
来年度の全国大会は、ハイブリッド開催も候補とのことであるが、開催地は想定されているのか。
→開催地はまだ決まっていない。開催を希望する場所、あるいは自分のところで開催したいという意向があれば、教えていただきたい（呑海会長）。
大学図書館の数が多地域で開催すれば会員勧誘をしやすいかと思ひ質問させていただいた。
- ・楫（広島地域グループ）
昨年度、秋田県が開催候補地となっていて実現できなかったが、今後、秋田県が候補となる可能性があるのか。
→今後の開催候補地は決まっていない。秋田県が候補地であったことも含めて考え

ていきたい。先ほど、会員勧誘のためには大学図書館の数が多地域での開催がよい、との案が出た。

その他、ハイブリッド環境が整備されている会場であればハイブリッド開催の準備をスムーズに進めることができるので有利だと思われる。開催する地域でのマンパワーが必要となることも考慮しなければならない。自分のところで開催したいという意向があれば教えていただきたい（呑海会長）。

（会誌『大学図書館研究会誌』の査読について）

- ・呑海会長
会誌の査読制度は、以下の2点の理由により整備したが、査読制度をスムーズに運用することができず、現在、「論文」原稿（査読有り）の受付を中止している。
- ・査読（査読をする、査読を受ける）を経験することでより学術情報流通への理解が深まると考えられること
- ・ステップアップのために自らの業績とすること
会誌に今後も査読制度を継続するかどうかについて、ご意見をいただきたい。
- ・小野（東京地域グループ）
従来型、現行型の査読の方法がよいのか、その他、最近のオープン査読の導入を考えたもよいのではないか。
→ご指摘のとおりである。オープン査読導入については、システム導入に予算必要となることも含めて考えてみたい（呑海会長）。

- ・田辺（東京地域グループ・学術基盤整備グループ）
査読の経験はあまりなく、査読の際は自己流でやってきた。会誌の査読のためのガイドを用意するのか。

→ガイドは必要であると考えているが、現在は用意していない。記入フォームに査読コメント記載についての説明はあるが、初めて査読をする人にとっては、わかりやすいとはいえないと思われる（呑海会長）。

・相場（グループ無所属）

研究論文を査読付き論文で発表したいとの気持ちがある。キャリアアップのため現場の経験に基づいて研究をしても、受入先の学会である大図研で査読付きの論文が出せないのは残念である。査読がないから悪いというわけではなく、査読により原稿を読んでもらいフィードバックが必要だからである。専門家の意見を聞いて原稿が更に良い内容になることを考えると、査読制度は導入していただきたい。

査読をしたいかという、近頃は、難しいと思う。いろいろなところに、いろいろなことが出てくるようになったので、どこに書かれているのかを1つずつ調べて確認していく時間と労力を要するため簡単な作業ではない。

・加藤（千葉地域グループ）

気が付かずに落としてしまうポイントは書き手以外でないと分からず、指摘され、推敲することにより、内容がよいものになるので、大図研が学術研究の団体を目指していることから、査読制度をステップアップの手段として使うのはよい。査読者も、査読を通して、読み手として落としてしまう点に気づかされる。

書き手、読み手、それぞれがブラッシュアップできる総合的な機会が大図研にあることを大事にすることはよいと思う。

・呑海会長

論文の投稿数も少なく、査読もスムーズに

進まなかったもので、査読を中止してもよいのではという気持ちになりかけていたのだが、本日いただいたご意見を踏まえつつ、新たな気持ちで査読制度の継続について考えていきたい。査読のお声掛けすることがあるかもしれないので、その際はよろしくお願ひしたい。

（五十周年事業記念出版物の編集について）

・北川（五十周年事業記念出版物編集委員会）
記念出版物への掲載原稿の作成について、各地域・研究グループには、ご配慮いただき、お世話になっている。その他、大図研の沿革に関する文章、記録資料の作成のために、会報のバックナンバーを参照する必要があるのだが、現在、学外者への利用を開放している大学図書館は少ない。会報のバックナンバーの閲覧を許可していただける図書館があったら、後日でかまわないので、教えていただきたい。

議長解任、議長への謝辞（上村事務局長）
会員総会終了

研究発表

9月17日(土) 16:00～16:45

What about the Humanities?

—COVID-19のオープンアクセスへの影響
と人文社会科学の未来について—

相場 洋子 (国際教養大学中嶋記念図書館)

(発表要旨)

本研究では、J-STAGEに登録済みのジャーナル論文(1999年～2021年)の、年ごとの全論文数、オープンアクセス論文数、査読アリ論文数、査読アリオープンアクセス論文数を調査した。論文をSTEM(科学、工学、医学系)、INT(学際科学系)、HSS(人文社会科学系)の分野別、そして日本語、英語の言語別に分け、その論文数の変化について、COVID-19感染拡大前後(2019年前後)を中心に報告した。

まず全体として2009年から2011年のあたりをピークに、それまで分野を問わず増加し続けてきたジャーナル論文数は、近年緩やかな減少傾向にあった。しかし、そのうちオープンアクセス論文数は、HSSを除いてCOVID-19感染拡大後に急激な増加を示していた。HSSは感染拡大後に一旦増加したものの再び減少し、とうとうINTに追い抜かれてしまったことが大きな変化であった。査読アリ論文数も同じ減少傾向が見られたが、そのうち査読アリオープンアクセス論文数は感染拡大後急激に増加し、2位INTと3位HSSの差はさらに広がった。

次に全ジャーナル論文中のオープンアクセス論文数の割合を2000年から2020年まで10年ごとに見てみると、3%から17%と着実に増加傾向であることがわかったが、2000

年からの全論文数が、74085件、79464件、そして66106件と、過去10年間ににおいて13358件も減少していることから、単純にオープンアクセス論文数が増えただけではないことを考慮せねばならない。但し特記すべきはHSSのオープンアクセス論文数の割合は常に他の2つの分野のオープンアクセス論文数の割合よりも高かったことが判明した。

オープンアクセス論文数を言語別に見てみると、増加と減少のジグザクを繰り返しながらも右肩上がり、感染拡大後は、急激な増加とともに、英語の論文数が日本語の論文数を上回るというそれまで見られなかった現象が現れていた。また査読アリオープンアクセス論文数の変化を言語別に見たところ、既に2017年には英語の論文数が日本語の論文数を上回っていたことがわかった。更に詳しく見ていくと、STEMとINTの査読アリオープンアクセス論文数は日本語の論文数を上回るほどの勢いを見せる一方、HSSは日本語と英語の論文は、ともに増加傾向を見せながらもその差が狭まることは無かったことが明らかとなった。

J-STAGE登録のジャーナル論文は、各組織にその入力を任されており、誤入力や未入力があり得るため、この結果報告の解釈において注意が必要である。またオープンアクセスの検索条件は2012年以降に追加されたものであり、詳細検索ページの分野の区分は適宜見直しがされている。こういったことを踏まえつつ、過去2回のプラットフォームのアップデートを経て、J-STAGEの加盟館は年々増え続けているため、バックナンバーの論文の登録が進んだ結果が、この調査報告に反映されている可能性も無視できない。

論文数にだけ注目すれば、他の分野に比べて人文社会科学系論文は明らかに少ないた

め、オープンアクセスは科学分野の研究のみで進んでいることというイメージを持ちやすい。しかし今回人文社会系において、他の分野と比べて常にオープンアクセス論文数の割合が高く、その割合の増加も大きかったことが判明したため、寧ろより活発にオープンアクセスモデルを取り入れ続けていると言えるのではないだろうか。今後更に調査を続け、COVID-19感染拡大の影響と人文社会科学の未来についてさらに深く考察をしていきたい。

(相場洋子/国際教養大学中嶋記念図書館)

記念講演

9月17日(土) 17:00 ~ 18:00

読書による知識の体系化

ー 分類・系統・アブダクション

三中 信宏 (国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構)

(概要報告)

記念講演は三中信宏氏から「読書による知識の体系化 -- 分類・系統・アブダクション」という題で行われた。

はじめに、著書の『読む・打つ・書く -- 読書・書評・執筆をめぐる理系研究者の日々』(東京大学出版会)及び『読書とは何か -- 知を捕らえる15の技術』(河出書房新社)の紹介があった。この講演では後者の『読書とは何か』の第1章である「知のノードとネットワーク -- 読書は探検だ」から特に「アブダクション」を取り上げ、話が展開された。

「アブダクション」とは「既知の部分から、未知の全体を推論する」という概念である。読書という行為は、読み始める前は分かる部

分は断片的であるが、読み進めていくうちに、知識の断片が増えていき、ついには全体的な知識体系がわかるようになるというイメージとして捉えることができる。つまり「読書とはアブダクション」であるという説明があった。

また、読書行為には往路と復路があり、往路では情報を拾い集め、復路では情報の断片をつなぎ合わせ、知識体系をつくりあげている。この復路で「アブダクション(部分から全体を推論する)」というヒト本来の認知能力を使っているという説明があった。

次に、往路と復路の例として2冊の本の読み方が紹介された。1冊目は上下巻で2,000ページに迫るS. J. グールド『進化理論の構造』(工作舎)である。往路として、付箋紙を貼る・傍線を引く・マルジナリア(余白)にメモを書き込む・読書記録としてtwitterにつぶやくという読み方をしている。また復路として、2,000ページの本をA4一枚の日経サイエンスの書評記事(いまよみがえる「ある英雄の生涯」)にまとめたという説明があった。2冊目はロックバンドのメンバーの変遷を系統樹で表し、その近辺に著者のコメントが付されたピート・フレーム『ロック・ファミリー・ツリー』(みすず書房)である。こちらはまだ往路の途中だが、ブログに読書記録を取りながら読んでいるという紹介があった。

最後に「読書における分類と系統」の説明があった。まず、読書で得たノード(情報のかけら・概念)をグルーピングし、似ている具合でまとめるという分類思考と、ノードからどんな全体が浮かび上がってくるのかを推論する系統樹思考の説明があった。その後、結論として『読書の「往路」では読書の関心に沿った要点(ノード)のサンプリングと分類をする。一方「復路」ではサンプルされたノードからその本全体をつなぐ系統としてのツリー(分岐的な系統樹)やネットワーク(網

状の系統図)の構築を行う。したがって、往路とは情報収集の段階であり、復路とはそれらの既知の情報に基づいて未知の全体を推論するアブダクションとみなすことができる』という説明があった。また、重要なこととして「読者によってある本の解釈が異なるのはもちろん、同じ読者でも読むたびに結論が変わることもある。アブダクションに終わりはない」というまとめがあった。

質疑応答では「電子書籍より紙の本のほうが長じているとしたら、どういうところだと考えるか」、「学生に読書の楽しさや重要性を伝えるには、どのようなアプローチが考えられるか」、「プロのIndexerは絶滅してしまうのか」などの質問があった。また「生物も図書も、はやりの機械学習でもそうだが、見た目、統計的に似ているけれど、系統が違う、ということがよくあるのかと思う。その系統を推論するのが大事かと思った」という感想なども寄せられた。

参考文献リスト

- 三中信宏 2010. 知識の樹 -- 図書分類と生物分類は共通のルーツをもつ. 特集〈分類新時代〉. 現代の図書館, 48 (4) : 262-269.
- 三中信宏 2017. 思考の体系学 -- 分類と系統から見たダイアグラム論. 春秋社, 352 pp.
- 三中信宏 2019. 学術書を読む愉しみと書く楽しみ -- 私的経験から. 特集〈学術書を読む〉. 大学出版, 2019年1月号, (117) : 1-8.
- 三中信宏 2021a. 読む・打つ・書く -- 読書・書評・執筆をめぐる理系研究者の日々. 東京大学出版会, xiv+349 pp.
- 三中信宏 2021b. 本の山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ. UP, 2021年8月号, pp. 14-19.
- 三中信宏 2022a. 読書とは何か -- 知を捕らえる15の技術. 河出書房新社 [河出新書・046], 292 pp.
- 三中信宏 2022b. 索引のない本はただの紙束

である. 特集〈あなたの知らない索引の世界〉. 本の雑誌2022年10月号, 47 (10) : 12-15.

(下城陽介/東京大学附属図書館)

課題別分科会

9月18日(日) 10:00～12:30
14:15～15:45

第1分科会 大学図書館史

テーマ：大学図書館問題研究会の歴史を見る
Part6

担当者：加藤晃一、小山荘太郎

参加人数：7名

司会：小山荘太郎

報告者・報告タイトル：

小山荘太郎氏(三重大学医学部図書館)

「大学図書館問題研究会の歴史を見る
Part6: 2001年～2010年の大図研」

配布資料：

- ・大学図書館問題研究会・大学図書館研究会略年表
- ・支部・地域グループ・研究グループ一覧
- ・資料 全国大会における分科会の一覧
- ・2001年～2010年の大図研の動き

大学図書館史を扱う第1分科会では、過去5回にわたり、「大学図書館問題研究会の歴史を見る」をテーマとした分科会が開催されてきた。6回目となる今回の分科会では、2001年～2010年までの2000年代の大図研の活動と大学図書館界の歩みをふりかえり、情報や意見を交換する場となった。

会の前半では、分科会担当の小山氏より、2001年から2005年における大図研と大学図書館界の歩みについて、会報・各支部や会員の動向・全国大会等の大図研の活動・大学図書館全体にかかわる主要な出来事等、配布資

料をもとに報告があり、参加者同士で論議を深めた。

後半では、2006年から2010年の大図研と大学図書館界の歩みについて、前半と同じく、小山氏より報告があり、参加者同士で論議を深め、その後、意見交換が行われた。

会は、史実をもととした小山氏による報告が行われたあと、当時を知る分科会担当の加藤氏より話題提供がなされ、それを受け、参加者からの発言が続くかたちで進み、一方通行でなく、分科会担当者と参加者が一体となって、改めて大図研の歴史を考える有意義な時間を共有できたように思う。

2000年代の大図研を総括すると、インターネット・ウェブサービスの一般化に伴い、2001年に大図研のホームページが開設されたことを皮切りに、各支部のホームページが開設されたり（メーリングリストは1998年の導入と図書館関連団体では早かったが、ホームページの開設は少し遅れていたとのこと）、全国大会会場でネットワークを構築するなど実験的な試みを行われたり等、電子化への活発な動きと実績がみられた一方、5つの支部の解散・休止があり（90年代に増加のピークを迎えた支部数は、2000年代には解散・休止が続いた。2003年山口支部、2005年岡山支部、2008年宮城支部、2010年新潟支部、奈良支部）、大学図書館員数自体の減少にともない、長期的な会員減少が続いていることなど、2020年代の大学図書館全体をめぐる問題が表面化した10年であったといえる。

大学図書館員数自体の減少における諸問題は、大図研だけにとどまらず、各種の図書館系の研究団体にかかわることであるが、この分科会に参加して（何の活動もしていない一会員ではあるが）、館種や業種にかかわらず、意欲的に活発な活動を続けてきた歴史ある大図研が会員減少を理由に先細りになってほしくないと感じた。

会の最後には、活発な意見交換が行われた。会の中で、大図研メーリングリストの話題がでたこともあり、分科会担当の加藤氏に、以前、メーリングリストで配信されていた「話のタネ」の再開を希望したところ、ご検討いただく旨、快諾いただいた。

なんと、その3日後には、「話のタネ」を再開いただいたことを、この場を借りてお礼申し上げたい。5年ぶりの配信とのことであつたが、再開を望んでいた方も多いのではないだろうか。（「話のタネ」をご存じでない方は、会報「大学の図書館」2015年9月号「誰でもデキル簡単な情報収集「話のタネ」の舞台裏」をご参照ください。）

次の全国大会では、7回目の「大学図書館問題研究会の歴史part7」が開催され、2011年からの大図研の歴史の振り返りが行われることを、一参加者として、期待している。この「大学図書館問題研究会の歴史を見る」は他の研究会ではできないテーマであるので、ぜひ長く続けていただきたいと心より願っている。

（棚次英美／千里金蘭大学附属図書館）

第2分科会 利用者支援

テーマ：医学・医療系図書館における利用者支援

担当者：下山朋幸、河野由香里

参加人数：30名

司会：下山朋幸

報告者・報告タイトル：

佐藤正恵氏（千葉県済生会習志野病院図書室）

「大学図書館研究会分科会②利用者支援」

川村路代氏（北海道大学附属図書館）

「北海道大学附属図書館におけるシステムティックレビュー執筆支援」

配布資料：

各報告者より発表資料の共有あり

この分科会は、医学・医療系図書館における利用者支援をテーマに、前半を2名の報告者からの話題提供、後半を全体座談会という形で開催された。前半では、まず佐藤氏からヘルスサイエンス系図書館で利用者支援をする際の前提として、「医療制度の現状」「利用者マーケティングとビジネス・フレームワークの活用」「ヘルスサイエンス図書館員と様々な役割」の3つのテーマでお話いただいた。ご自身の着任した場所で、業務を通して興味関心をもったテーマについて、常に真摯に向きあい知識を深めて来られたことを感じさせる多角的な視点からの話題提供であった。AIに代替される職業として図書館司書や検索者が挙げられていることを引き合いに、そうならないために必要な心構えや取り組み方を、ご自身の実践例も交え伝授いただいた。着任したらまず行っていることとして佐藤氏が挙げられていた点について、私自身は着任してだいぶ年月が経ってしまったが今さらながら実践したいと考えた。

次に川村氏から、北海道大学附属図書館におけるシステムティックレビュー執筆支援について事例報告いただいた。本件は令和3年度国立大学図書館協会賞を受賞した事業である。初めに日本医学図書館協会の機関誌『医学図書館』69巻3号(2022年10月刊行済み)の特集で実践報告として、当分科会担当者の河野氏と共著で掲載されていることも紹介された。また当分科会の配布資料は北海道大学の機関リポジトリHUSCAPに当分科会の発表資料として掲載されているので、ご参照されたい(<http://hdl.handle.net/2115/86814>)。当日の発表では、学内で図書館の研究支援業務として認知され、定着に至る過程を丁寧にご紹介いただいた。医学部・保健学科・歯学部・薬学部の図書室で構成される「医系グループ」の5名体制で業務を担っており、1件につき2-3名の担当者を決め取り組まれている点について、スキルの問題もあり属人的にな

りやすく、異動等によって衰退しがちな業務内容において、継続性のある体制づくりをされていること、また研究者が論文化の際に共著者または謝辞等に担当者の名前も入れてもらい業務の実績を形として残している点などが紹介された。実際に利用した研究者の感想として、所属の図書館にて無料で実施していることの驚きと感動の声は予想通りでもあり、同時にレファレンス業務の認知度が低い現実を知らされるものであった。この事例を知った他機関の研究者が、所属先の図書館でも同様のサービスを利用できるか問い合わせを行った場合に対応出来る館ばかりではないだろうが、川村氏の「やれるようになるのを待っている、いつまでもやれるようにはならない」というメッセージは心に響くものであり説得力があった。

後半の座談会では、話題提供に関する質疑応答と事前アンケートで寄せられた日頃の業務で感じている課題や質問について、参加者からの意見を募り情報交換をした。時間が足りないと感じるほどさまざまな情報提供があり大変参考になった。

全体を通して感じたことは、利用者のニーズをタイムリーにキャッチし、時機を逃さずサービスを展開する機動力が必要で、多少自信がなくとも利用者の力も借りながら一歩を踏み出すことも時には大切だということ、そして踏み出して展開した成果は事例報告などの形として公開していくことで、さらに次につながる好循環を生むということである。参加者の中にはすでにそれを実践し、事例発表や論文等として公開されている方も多くお見かけし、実績を積まれても常に情報収集に真摯に向き合う姿に身の引き締まる思いがした。

(平山紀子/久留米大学医学図書館)

第3分科会 資料保存

テーマ：紙資料から電子資料への置き換えに

ついて考える

担当者：楫幸子、和知剛

参加者数：27名

司会：楫幸子

報告者・報告タイトル：事例紹介6名

配布資料：なし

第3分科会「資料保存」は、「紙資料から電子資料への置き換えについて考える」というテーマで開催された。資料を保存する、という命題に対し、紙媒体、電子媒体の資料をどのように活用するか、という点について情報交換をおこなうことが目的である。

参加者には発表テーマ、意見交換したいテーマ等についての事前アンケートが出され、参考文献も紹介された。当日はブレイクアウトルームに少人数に分かれての自己紹介から始まり、その後、以下の3つのテーマについて事例発表がおこなわれた。

1. 電子ジャーナル・電子ブックが提供されている資料の、紙版について

各機関の電子資料購入時に注意している点や、電子資料への移行の進め方等が発表された。NDLが電子版を提供しているものは冊子体を廃棄して、電子版をOPACに表示させるといった工夫をしている機関もあった。書架の狭隘化への対応のため、コロナ禍を契機として電子化を進める等、機関により理由は異なるが、電子化への流れは確実に進んでいるのを実感した。

電子化を進める際の問題点も確認することができた。1つのタイトルがMaruzen eBook Library、KinoDen、EBSCO eBooksのような異なるプラットフォームで提供されている場合の重複チェック、利用者への案内の難しさ等である。また、研究者にとっては紙資料にある「広告」が必要な場合もあるため、電子資料を整備したからといって、即座に紙資料の廃棄とはできないという点も悩ましい問

題である。

2. 電子的な資料の保存媒体（HDD、DVD ディスクなど）について

この発表では、デジタルアーカイブのコンテンツを、HDD、DVD、CD等のメディアを活用して保存している事例を聞くことができた。PhotoCD、MO、FDのように、記録メディアが既に流通していないような古いものは、媒体変換して保存しているようで、このような対応は今後どの図書館でも必要になると思われる。

3. 電子ブックや電子ジャーナルの契約中止、提供中止について

電子ジャーナルの価格高騰と、異常な円安により、電子ジャーナルの予算確保は、どの機関も例年になく厳しいものになっているようだ。購読を中止してPayPerViewへの切替も検討する等、様々な対応を迫られているようである。購読中のタイトルの維持もできず、新規のタイトルが全く購入できない状態が続いていることを危惧する声も寄せられた。

また、紙資料のバックナンバーの保存について、電子資料に永続的にアクセスできる環境があれば廃棄しても良いのではないかとの言及があった。この点について、国立国会図書館デジタルコレクションとして公開されている資料については、原本が破棄されることはなくとも、アクセスができなくなる可能性がゼロではないので、それを頼りに自館の資料の廃棄を検討することには注意が必要である、との補足もあった。

事例発表後、「1. 紙版から電子版へ移行を進めるべき図書」、「2. 学術雑誌の廃棄案を作成する際の基準という2つの課題について、グループに分かれディスカッションをおこなった。

学術情報流通の媒体が、紙から電子への移

行が進む中で、図書館の役割の1つである「保存」についてどのように対応するか、今後議論を深めていかななくてはならない。多くの機関の方と情報交換ができたのは非常に有益であった。

(磯本善男/千葉大学附属図書館)

第4分科会 キャリア形成

テーマ：管理職としてのキャリア

担当者：柿原友紀、中川恵理子

参加人数：29名

司会：柿原友紀

報告者・報告タイトル：

1. 井上昌彦氏（関西学院大学図書館）
「見習い管理職の思うこと」
2. 大谷裕氏（東邦大学医学メディアセンター）
「管理職2年目の概観」
3. 高橋菜奈子氏（東京学芸大学附属図書館）
「女性管理職としての話題提供」

配布資料：

(大会後に参加者へ報告資料共有)

分科会の最初に参加者の自己紹介を兼ねて、本テーマで聞きたいことを出し合った。その後、管理職であるお三方からお話を伺った。最後に参加者から寄せられた質問に対して意見交換を行った。

1. 見習い管理職の思うこと

報告者：井上 昌彦 氏（関西学院大学図書館）

井上氏が管理職として気をつけていることは、課員に対してポジティブであること、具体的な行動を褒めることの2点である。また、管理者にならないと見えてこないこと、気づかないこと、できないことがあり、自分の価値観や理念を持って取り組んでいく姿勢が大事であると述べられた。「役職は帯であり、

帯が人を育てる。必要以上に自分を過小評価しないように」とアドバイスをくださる一方で、管理職ではない人もリスペクトされる文化が大事であるとし、管理職にならないキャリア選択もあることを示してくれた。

「なぜ管理職になりたいのか?」「何のために働くのか?」「仕事を通じて何をしたいのか?」と井上氏は問う。私はこれまで管理職・監督職は分不相応であると考え、職場の昇任試験からずっと逃げ回っていた。管理職にはなりたくないが、仕事を通じて自己成長や社会貢献は果たしたい。そしてお金も必要だ。改めて考えると昇任試験を受けないという私のこれまでの選択肢は矛盾することに気がついた。自分のキャリアを考える良いきっかけとなった。

2. 管理職2年目の概観

報告者：大谷 裕 氏（東邦大学医学メディアセンター）

大谷氏が管理職として気をつけていることは空き時間をつくる、早くメールをかえす、残業をしない・させないの3点である。

東邦大の図書館は法人組織や他部署から一定の信頼感を得ているが、電子コンテンツの充実や授業のオンライン化が進む中で、今までのようなスペースや人員は図書館に不要との声が出てくるのではという危機意識を持ち、新しい業務に積極的に取り組んでいるそう。法人からの依頼で、授業目的公衆送信補償金のとりまとめ、研究データ管理に関する組織づくり、研究データポリシーの策定、LMS関連の委員会運営を行い、図書館として7つの主題別ヘルプデスクの運営といった新しい業務に取り組んでいるとのことだ。

大谷氏を含めこれまでの東邦大の図書館員たちの業務への積極的な姿勢やその成果が、今の図書館の信頼を得ているのだと感じた。私は学生や教員のニーズばかりを優先してきたので、今後は他部署や法人のニーズにも目

を向けていかなければと気づかされた。

3. 女性管理職としての話題提供

報告者：高橋 菜奈子 氏（東京学芸大学附属図書館）

高橋氏からは国立大ならではのお話と、女性管理職の立場でのお話を伺うことができた。国立の場合、課長以上は全国区で、2～3年で異動があるそうだ。さまざまな組織を経験しながらキャリアを積めるメリットがある一方、転勤を伴う異動がある場合、管理職へ挑戦する女性は少ないのではないだろうかとも感じた。

自信のなさから管理職を目指さない人に対しては「経験によって自信は（後から）ついてくる」、家庭との両立で悩む方に対しては「一人で抱え込まない、管理職になったほうがむしろ裁量が増えて仕事のコントロールがしやすくなる」とアドバイスをくださった。また管理職になってよかったこととして「視野が広がる！図書館を俯瞰的に眺めることができる」「自分の権限の範囲内で、課題を解決できる！」「大学や他部署の論理を理解しつつ、図書館の理想の実現を働きかけることができる！」の3点があげられた。

これまで管理職＝大変というイメージしかなかったが、自分のやりたいことを実現するために管理職になるという前向きなイメージを持つことができた。最後に報告者のお三方、担当のお二人、参加者のみなさまに御礼申し上げます。

（小野未来子／福岡女学院大学図書館）

第5分科会 学術基盤整備

テーマ：電子資料の利用者認証・認可

担当者：田辺浩介、上村順一

参加者数：25名

司会：田辺浩介、上村順一

報告者・報告タイトル：

水元明法氏（物質・材料研究機構 統合型材料開発・情報基盤部門）

基調講演「電子資料の利用に関わる利用者の認証・認可」

配布資料：

「電子資料の利用に関わる利用者の認証・認可」

第5分科会は学術情報基盤「電子資料の利用者認証・認可」というテーマで行われました。特に電子資料の利用に関わる利用者の認証・認可をテーマということで、多くの電子資料の認証を扱う会員・非会員が集まり、分科会が行われました。

私は学術基盤整備研究グループの一員として希望し参加しており、このテーマに決まる際にも若干関わっていましたので、このテーマで人が集まるか不安でした。しかし、その不安は杞憂に終わり、積極的な参加者が多数集まっていました。

司会の田辺様の説明のあと、最初に物質・材料研究機構（NIMS）水元様から「電子資料の利用に関わる 利用者の認証・認可」と題した話題提供を通して、前提や現状、未来についてお話いただきました。話題提供は3つに分かれており、1つめが電子資料の利用にかかる認証・認可について、2つめが大学における認証・認可の現状について、3つめが適切な認証・認可制御で実現できる未来についてお話いただきました。1つめの認証・認可について前提となる説明を行っていただきました。認証についてだけでなく認可との違い、IdP、SP、シングルサインオン（SSO 統合認証）、フェデレーション、ID連携・認証連携といった用語の確認、多要素認証については電子資料の閲覧に、多要素認証は必要か？というクエスチョンマークがついており、印象に残りました。2つめに大学における認証・認可の現状について学認を中心に説明されました。「統合認証の利便性を覚える

と、もうやってられない」というお話には、大変共感できたのですが、面倒も多いなあと思っていたときにIDaaSという選択肢がだされていました。3つめに未来については世界各国のフェデレーション相互接続eduGAINについての説明と「IdPを設置して、学認に参加してみよう。参加済みであれば、より利便性を高め、利益を享受しよう」という話でしめられました。最後はお時間の関係で若干短めだったかもしれませんが。

その後、電子資料の認証・認可に関わる課題や悩みを共有し、運用の助けにつながる議論が行われました。これらはさながら、困りごと相談室のような感じとなりました。水元様と分科会ご担当の国立情報学研究所上村様、物質・材料研究機構(NIMS)の田辺様はお仕事を通じて、関係が深く、和気藹々とした雰囲気では進行しました。質問は学認の設定費用や電子資料の認証と日本のベンダーについての意見交換、学認の構築負荷、NIIの学認の研修プログラム、図書館系サービス作業部会の紹介等、活発な意見交換が行われ、盛会にて終了しました。

全体の感想としては参加者それぞれの問題意識と技術が様々な状態の中で、担当者様、水元様が丁寧に対応いただき、よい分科会であったと思います。これからも変化していく電子資料の認証について、様々なステークホルダーがいることをあらためて考えることができました。ご準備いただきましたご担当者の皆様、大変ありがとうございました。

(野間口真裕/京都大学附属図書館)

第6分科会 図書館経営

テーマ：大学図書館経営危機をどう乗り切るか～先行事例研究から学ぶ(公共図書館を中心に)

担当者：井上昌彦、安東正玄

参加者数：14名

司会：安東正玄

報告者・報告タイトル：

常世田良氏

配布資料：なし

第6分科会は講師に常世田良氏を迎えて開催された。氏は冒頭で「“どうなればいいか”の話は出尽くしている、“どうやって”の部分に考える時間を充てなければならない。」と問題提起された上で、ご自身の様々な経験やアメリカの図書館事情を踏まえ、多岐にわたる解決策のヒントを示された。以下、箇条書きで氏のお話を整理してみたい。

- ・課題を整理・分析する。忙しくとも、エビデンスによる客観的分析が必要。
- ・組織のミッションを意識する。「課題解決型サービス」の目的は地域の経済活性化、医療コスト削減。図書館人にはミッションを意識せず「自分の好きな仕事」をしている人も少なくないが、大学では？
- ・アドボカシーは重要。トップ、キーパーソンを味方にする。キーパーソンはトップとは限らず、組織内で一目置かれる、トップが影響を受ける人が対象。キーパーソンリストを作る、組織内での勢力の変化も考えて例えば<真田家戦略>(生き残りのために複数の相手にアプローチ)をとる等。媚びへつらうのではなく、モラルを守っての「裏工作」が必要。また組織内でも特に企画、財政、人事、広報のセクションとは連携する。行政支援など身内の仕事を支援する。業務上の「貸し(恩を売る)」の効果は絶大。誰もがアドボカシーが得意なわけではない。周囲が支えると共に、それぞれのキャラクターに合ったやり方を。
- ・アピールの方法を工夫する。新聞社には些細なイベントでも情報提供する。組織内広報も大事に。長い話は嫌われるので短くて「突き刺さる」キャッチフレーズを。例えば公共図書館なら「最近の図書館どう?」と聞かれ「ビジネス支援をやってます」と

返せば、オット思ってもらえる。

後半は3グループに分かれてディスカッションが行われた。大学と自治体双方のミッシェンの調整、望ましい職員の在り方、利用者増のための取り組みなどの課題について、各グループで討議されたが、常世田氏からは「やはりアドボカシーに行きつくまえに現場の課題が噴出。日常的に情報交換ができてない印象」との講評があった。そして締めくくりとして、「特効薬はない、少しずつ積み重ねを。経営サイドが深刻に求めている路線に対して図書館が組織を挙げて動いていることのアピールが重要。1人では難しいので日常的な拠り所が必要」とのコメントがあった。

今回の分科会は、公共図書館の勤務経験もある筆者としては大変興味深いものであった。他部署との連携が単なる人員や場所の貸し借りで終わっていなかったか、アドボカシーが市民団体のような最初から図書館の話に耳を傾けてくれる層だけを対象にしていなかったか。司書資格も図書館勤務経験もないが、図書館に理解があり色々応援してくれていた本庁職員を館長に迎えたということもあったが、単に「人に恵まれた」と安心して終わっていなかったか。自身の経験や見聞を振り返る良い機会となった。

図書館として考える理想のサービスや組織の在り方がトップや他部署に受け入れられない場合、その原因が提示する内容にあるのではなく、コミュニケーション力、交渉術にある可能性ももっと考えねばならないのではないだろうか。サービスが良ければ味方が増えるというのは理想的に過ぎるかも知れない。時にはいい意味で狡賢く立ち回り、落としどころを考えていく交渉術も我々には必要ではないか、そんなことも考えさせられた。

分科会の冒頭で常世田氏が述べた「研修はガス抜き、何か分かった気になって、現場に

戻っても何もしない」という一言は重く突き刺さったが、今回の分科会を受けて今後勉強会を立ち上げるという計画にもつながり、大変有益な時間であった。

(野村 健／丸善雄松堂)

第7分科会 図書館建築・デザイン

テーマ：アクティブラーニングスペースの現状とこれからを考える

担当者：赤澤久弥、吉田弥生

参加者数：21名

司会：吉田弥生

報告者・報告タイトル：

土出郁子氏（大阪大学附属図書館）

配布資料：なし

第7分科会「図書館建築・デザイン」では大阪大学理工学図書館の土出郁子（つちで・いくこ）氏による報告が行われた。報告後、質疑応答とグループディスカッションが実施された。以下、4点にわけて本分科会の様子を報告する。

(1) 土出氏の報告に関して

わが国において2008年以降ラーニングコモンズを始めとするアクティブラーニング導入の流れが進んでいる。これは学びの質・カリキュラムの転換を受け学生の自発的なLearningを促進する場所として検討されたものである。しかしながら、当初は対面（フィジカル）による実施のみが前提であった。

2018年に出された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」では大学設置基準の抜本的な見直しの必要性について提言され、施設設備のあり方にも触れられる結果となった。また、2020年以降のコロナ禍ではLearningがフィジカルな場だけではもはや機能しえないことも示唆され、オンラインをいかに組み合わせていくかが求められている。

そのため、図書館を単なる Reading や Teaching の場とするだけでなく、Learning の場としていくためのラーニングスペース導入や運営が現在求められている。具体的には空間・コンテンツ・人的支援を組み合わせた場所として図書館を考えていくことが必要であろう。

このような前提から、実際の利用者サービスで起こっていることなどについての報告が行われた。

(2) 質疑応答に関して

質疑応答では3つの質問が出た。1つ目は「大阪大学理工学図書館での防音対策はどのようなか」という質問である。現在、学生の就職活動面接をオンラインで受講する際、図書館などを利用したい旨の依頼がある際、個人情報保護のため防音対策が必要ではないかとの質問であった。大阪大学理工学図書館ではグループ学習室は閲覧席から離れているので他の利用者の影響がないようになっている。このスペースは設備を整えているため比較的音が外部に漏れにくいという特徴があるという。現在、オンライン面接などを図書館で受けたい学生に関してはこのグループ学習室の利用を呼びかけているとの返答があった。

2つ目は「コロナ禍で席を間引きしているとのことだが、席が足りないという声はないか」という質問であった。実際のところ、現在不足するところもあるようであり、現状ではコロナ前の2/3にしているが後期からはコロナ前の席数に戻す予定であると返答があった。

3つ目は「今後の展望について伺いたい」との質問であった。現在はイベント実施のルールとして小規模単位での実施を行うようにしているとのことだった。今後、イベント開催時の定員をどうするかなどは運営側の状況を見ながら対応していきたいとのことだっ

た。

また、コロナ禍でイベント実施がオンライン実施あるいはハイブリッド実施となっているが、対面のほうがコミュニケーションを取りやすい状況もあるため今後さらに検討していきたいとのことだった。

(3) グループディスカッションに関して

Zoomのブレイクアウトルーム機能を活用し4グループで2回グループディスカッションを行った。前半ではグループ内での自己紹介とアクティブラーニングについての自館の取り組みについての共有をおこなった。後半では「今後、図書館施設に求められる機能や役割は？」とのテーマで「アクティブラーニングスペースで行われると想定される活動は？」「それらの活動にとって必要となる機能・設備・サービスは？」という内容のグループディスカッションとなった。

筆者の参加したグループ1では現在の図書館運営においてアクティブラーニングの実施やコロナ対策としての何らかの制限（人数制限・予約制の実施）や換気・消毒の実施などを取り組んでいる旨の発言があった。また、コロナ前の状況にどのタイミングで切り替えるか、またコロナ後どのように運営を行っていくかなどを検討していく必要が議論された。

「教育活動がバーチャルな場に移行したとして、リアルな「場」としての図書館に学生・教員が求める役割・機能は？」という全体への発問に対し、「遠隔地のイベントをライブビューイングできるような場」というユニークな発言も出るなど意見交換を積極的に行える機会となった。

ディスカッションを通して、図書館によってはやり方が共通するところもあれば相違するところもあり、多様な取り組みがなされていることを実感する機会となった。

(4) 全体を振り返って

今回の分科会では、大阪大学理工学図書館を例にアクティブラーニングをはじめとする Learning のあり方を検討することができた。ポストコロナに向けて大学図書館のあり方として学生の Learning をサポートする場としていく必要性を感じている。

分科会を通して筆者の勤務館の課題点を明確にすることができた。今後の改善に努めていきたいと考えている。

川端幸枝（酪農学園大学附属図書館）

第8分科会 出版・流通

テーマ：学術情報流通の現状の改善に向けた
大学図書館の対応を考える

担当者：北川正路

参加人数：25名

司会：北川正路

報告者・報告タイトル：なし

配布資料：なし

2021年2月に発表された「我が国の学術情報流通における課題への対応について（審議まとめ）（科学技術・学術審議会 情報委員会 ジャーナル問題検討部会）」では、学術情報流通の現状の改善に向けた課題が示され、大学図書館を含む関係機関がこれら課題に取り組むことが要請されている。学術情報流通に関して、とくにジャーナル関連については、平素の図書館業務では、購読の維持という目の前の対応に翻弄され、「審議まとめ」で提示されているように広く課題をとらえる余裕がないのが現状かもしれない。

本分科会は、目の前の対応に翻弄される現場から離れ、「審議まとめ」にて提示されている各課題の内容を、関連事項を含めて確認することにより、学術情報流通の現状の問題点を全体的に把握し、更に、現状の改善のために大学図書館は何ができるかを、意見交換を通して考えることをテーマとして開催さ

れ、当日の司会を担当した。

冒頭の自己紹介では、本分科会を選んだ理由として、学術情報流通の議論で常に言及される「審議まとめ」を、本分科会参加を機会として、熟読しようと思ったからという点が複数の参加者から挙げられた。

実際、意見交換が始まると、ジャーナル購読契約内容についての出版社との交渉の在り方、転換契約の事例と APC 支払額の把握方法、投稿雑誌選択のためのチェックリストの提供、ジャーナル契約の実情に関する学内への説明、学術情報流通の改善に向けた学内研究者との連携方法、オープンアクセス方針の策定、グリーンOAの在り方、今後の研究データ管理に向けた活動に関する内容など、「審議まとめ」においても触れられている多岐な内容が、限られた時間内で挙げられた。多岐な内容であったが、「審議まとめ」の内容を参照しながら議論したため、学術情報流通の改善という視点を保つことができたと思う。

転換契約、オープンアクセス促進などの内容では、積極的に取り組んでいる館とほとんど取り組まない館があり、取り組みがなく、焦りを感じていた参加者もいたが、意見交換の中で、積極的に取り組んでいる館の状況を把握できた結果、それぞれの館が、内外の動向を把握しつつ、自館の事情に適した活動を考えていくことが、長期的な改善、発展につながるという意見でまとまり、「焦りが消えた」との声も聞かれた。

終了時間近くなり、リポジトリにおける著作権処理方法、購読誌選定に関する学内調査の内容など、具体的な質問も出された。これは、意見交換の中で、各参加者の専門や経験を知ることができ、平素、どこに相談すればよいか分からず悶々と悩んでいた内容を聞くことができる雰囲気であったためであると思う。今後の分科会では、平素、相談できずに困っている事項について、質疑しあうことができる内容を考えてもよいかと思った。

(北川正路／

東京慈恵会医科大学学術情報センター)

協賛企業プレゼンテーション

9月18日(日) 13:00～13:50

協賛企業のうち3社からプレゼンテーションがあった。

- (1) 日本事務器株式会社
「学習支援のための文献レビューアプリ
BOOK MARRY (ブックマリー) のご
案内」
- (2) 株式会社カーリル
「カーリルの最新情報2022」
- (3) 株式会社ネットアドバンス
「ジャパンナレッジLibアップデート」

シンポジウム

「司書」養成の現在地

9月19日(月・祝) 9:30～12:30

シンポジウム「司書」養成の現在地」記録

1. 「司書養成の現状と課題」

日向良和 (都留文科大学教授)

公共図書館を取り巻く社会の変化に応じて、2012年度より司書資格取得に必要な単位が改正され、課目が増え履修時間が増えた。この改正では「これからの図書館像」(2006年)を受けて課題解決型図書館を目指すための対応などが取り入れられた。一方で本務校における司書課程の受講者は年々減少している(この10年間で3割減)。また、児童サービス論のように担当者を確保するのが困難になりつつある科目も存在しており、単位の実質化という文部科学省の方針もあって、卒業に関係のない資格課程のこれ以上の単位数増

は難しい。

現行の司書資格は公共(公立)図書館のための資格だが、大学図書館でも学校図書館でも、図書館業務の基礎として機能している。しかし公共図書館の役割が時代とともに変化しており、図書館サービスはインクルージョン社会への対応(図書館を上手に使いえないひとたちへの対応)を意識しなければならない。ユニバーサルサービスとしての図書館サービスは、様々なライフステージへのサービスを包含することになり、相対的に児童サービスの位置が低下している。

司書資格課程の見直しはそろそろ始めるタイミングにあると思われる。これ以上の単位増は難しく、より専門性の高い資格とするには需要がなく、大学院化も困難である。それを踏まえた上で、今後の展望としては、インクルージョン社会に対応した課目が求められる。図書館概論と図書館制度・経営論を統合し、児童サービス論は必修から選択とし、様々な年代別のサービスを学べるようにする必要がある。情報資源組織論や情報資源組織演習では「地域資料」への言及、情報サービス演習ではアウトリーチ・サービスへの言及がそれぞれ必要である。電子書籍や電子図書館への言及も必須になっていくだろう。

2. 「大学図書館の現場における職員養成の現状と課題」

佐藤初美 (東北大学附属図書館総務課長)

大学図書館職員の養成に関する課題について「採用時」と「採用後」に分けて考えたい。大学図書館に欲しい人材を採るため、国立大学では全国共通の専門試験を実施している。司書資格取得のための科目をベースにしているが、大学図書館が直面する時事的な問題もかなりの割合を占める。また、内容は図書館学に関する問いであっても長文の英語読解の体裁をとる問題も複数あり、現場での英語重視の状況もみてとれる。試験については「大

学図書館で今後どういう人材が欲しいか」が現れる場でもあるため、問題の内容と合わせ、試験そのものの在り方も大学図書館を取り巻く状況に合わせ、見直しの議論が繰り返し行われていると認識している。

一方で採用後の養成は、今後の大学図書館が果たす役割に応じて目指すべきところが設定されるが、ひとつの目安としては昨年策定されたビジョン2025がある。ただ、具体的な人材像については速やかな提示に向けて検討しているところであり、喫緊の大きな課題である。国立大学図書館協会の人材委員会では、まずは会員館で実施されている多様な取り組みとその成果をこれまで以上に共有し、今後の方向性を見つけ出そうとしているところである。研修や海外派遣事業などの在り方についても、コロナ禍を挟み転換の必要があると個人的には認識している。必要なスキルの習得については既存の研修だけでは足りないが、自己研鑽に頼りすぎるのも望ましくはない。各大学に求められる機能が異なっている状況で、人材像とその養成方法を示すには工夫が必要と思われる。

国立大学図書館の職員数は近々に増える局面は考えにくいいため、現状の人員で多様な役割を担う必要があるというのが実情に近い。多様なスキルや背景を持つ職員が協働することが望ましいが、そうではない場合は各職員が新たな役割にチャレンジできるかどうかにかかっている。他部局との連携も引き続き必須であろう。

公共図書館で働く司書を養成するための科目は、大学図書館には十分とは言えないが、図書館職員としての考え方、システムに関する具体的な演習などは基盤として有効だとは感じる。どの職場でも共通かもしれないが、勤務を続ける中で、自分の中で「大学図書館員の仕事はこれとこれ」と決めつけることなく、広い視野を持ってチャレンジの機会を大事にすることが重要。また、職場としてもそ

うした新しいチャレンジを積極的に評価していく仕組みが出来るとういと考えている。

(和知剛/郡山女子大学短期大学部)

自主企画

地酒の会拡大版

日時：9月18日(日) 17:30～18:30

参加者：26名

担当者：山口友里子

内容：

昨年に引き続き、オンライン形式による地酒の会を開催しました。昨年からの変更点として、事前申し込みを不要とし、また、様々な方に参加していただきたいとのねらいから、名称に「拡大版」を加え、地酒以外の飲料(ノンアルコール含む)やおつまみ・おやつ等の紹介も可能と明記して広報を行いました。結果として、植物や酒器といった食品以外を含むバラエティ豊かな逸品を多数紹介いただくこととなり、にぎやかな会となりました。

当日は画面越しの乾杯の後、ブレイクアウトルーム機能を使って2グループに分かれ、順番におすすめの逸品を紹介しあう形式を取りました。また、参加者には、紹介した品の情報をチャットに書き込んでいただき、終了時に参加者が情報を持ち帰ることができるようにしました。

終了後は、昨年同様にチャットに寄せられた情報をまとめ、全国大会の全参加者向けに共有しました。対面開催の時のように持ち寄った地酒を一緒に味わうことができないことはオンライン開催のデメリットですが、情報をその場で検索しチャットで文字情報としてシェアできること、その情報を保存しておく、後日の見直しや共有ができることはオンラインならではの強みかと思えます。

なお、今回、3名の会員の方に運営を手伝っていただき、会を盛り上げていただきました。限られた時間、またオンライン形式のため制約がある中での開催となりましたが、参加者のみなさんの協力により楽しい会となりました。感謝申し上げます。

(山口友里子／一橋大学)

絵本・読み聞かせの会

日時：9月19日（月・祝）13:00～14:00

参加者：17名

担当者：小林（安藤）和実

内容：

今回、初企画として「絵本・読み聞かせの会」を大会3日目の9月19日（月）に開催しました。この企画は、小学校で読みきかせをしている主催者である私が、大会に参加された方の中で読み聞かせの活動をしていらっしゃる方や絵本に興味のある方と、互いの活動やおすすめの絵本について情報交換をおこない、楽しい時間を過ごすことができるという極めて個人的な動機からスタートしたものです。

初めての企画の上、おすすめの絵本紹介や活動の紹介をしてくださる方の事前募集に申込がなく、当日何人の方がいらっしゃるのか不安でしたが、最大17名の方にお越しいただきました。紹介の事前申込者がいなかったことから、会の進行を皆様から絵本を紹介していただく形に急遽変更し、まず、参加した方に参加動機やおすすめの絵本、関りをお話いただきました。参加者全員が読み聞かせの活動の経験者という訳ではありませんでしたが、おすすめの絵本や思い出の絵本をご紹介いただくことで、互いに好きな絵本に共感し、過去に触れた絵本を懐かしく思い出すなど、始終和やかな雰囲気では進行しました。

今回とても良かったことは、単に絵本の紹介や活動の紹介にとどまらず、絵本との思い出や関り語っていただいたことです。絵本を

媒介にし、大学図書館研究会の活動とは異なる点から、人となりを知ることができたことが大変面白く、全国大会最終日の良い締めくくりとなったのではないかと思います。

(小林（安藤）和実／東京都立大学)

交流会

9月17日（土）18:30～19:30

全国大会1日目の最後のプログラムとして、昨年に引き続きオンライン形式での交流会を開催し、35名の方に参加いただきました。全国大会参加者同士の交流の機会とすることに加え、全国大会にどのような人が参加しているのかを知り、翌日以降のプログラムでの活発な情報交換・議論につなげていただくことをねらいとして、以下の流れで実施しました。

- ・会長挨拶
- ・趣旨説明
- ・各グループ紹介（9地域グループ、1研究グループ）
- ・小グループでのフリートーク（ブレイクアウトルーム機能を使用）

なお、グループ紹介については各グループに所属している会員から普段の活動について紹介いただき、またフリートークの取り回しについては4名の会員に依頼し対応いただきました。グループの振り分けはZoomの機能を用いランダムで行ったため、誰と同じグループとなるかその時までわからない状況でしたが、初対面の方とも積極的な情報交換や意見交換が行われている様子が見受けられました。

翌日も午前中からプログラムが予定されていることから時間の延長を行わず60分で終了したため、参加者の感想からは多少の物足りなさが残ったようです。また、オンライン

実施の場合の使用ツールについては、今大会では参加者が操作に慣れているだろうという予測および費用面から大会の他のプログラムと同じZoomを選択しましたが、この場合、ブレイクアウトルーム含めグループでの交流が基本となるため、対面開催のように対一の自由な交流も可能とするのであれば、他の交流ツールの導入も検討の余地があるかもしれません。

(山口友里子／一橋大学)

第53回全国大会 協賛企業・団体一覧

第53回全国大会開催にあたり、以下の企業・団体様からご協賛をいただきました（50音順）。ここに深く感謝申し上げます。

NPO 医学中央雑誌刊行会
株式会社カーリル
株式会社カルチャー・ジャパン
株式会社紀伊國屋書店
株式会社規文堂
株式会社サンメディア
株式会社シー・エム・エス
株式会社樹村房

株式会社ソフエル
株式会社ネットアドバンス
株式会社メタ・インフォ
日外アソシエーツ株式会社
日本事務器株式会社
日本ファイリング株式会社
丸善雄松堂株式会社
有限会社藤井洋書

大学図書館研究会 第53回全国大会 会員総会資料

目 次

【第1号議案】第52期（2021/2022年度）活動報告

1. 活動日誌
2. 地域グループ報告
3. 研究グループ報告
4. 常任委員会等

【第2号議案】第52期（2021/2022年度）決算報告・会計監査報告

1. 2021/2022年度一般財政決算報告
2. 2021/2022年度大会基金決算報告
3. 2021/2022年度出版財政決算報告
4. 2021/2022年度五十周年事業基金報告
5. 2021/2022年度会計監査報告

【第3号議案】第53期（2022/2023年度）活動計画案

【第4号議案】第53期（2022/2023年度）予算案

1. 2022/2023年度一般財政予算案
2. 2022/2023年度大会基金予算案
3. 2022/2023年度出版財政予算案
4. 2022/2023年度五十周年事業基金予算案

【第5号議案】第53期（2022/2023年度）役員案

大学図書館研究会の会則改正に係る修正案

大学図書館研究会出版物の取扱い（案）

※この資料では、以下の省略形を用いる。

正式名称	省略形
大学図書館研究会	大図研
大学図書館研究会報『大学の図書館』	会報
大学図書館研究会誌	会誌
ワーキンググループ	WG

【第1号議案】 第52期（2021/2022年度）活動報告

全国委員会、常任委員会、会計監査について、特に記載のないものはオンライン（Zoom）で実施した。

1. 活動日誌

[2021年]

7月15日（木）

会報2021年6月号発送

7月25日（日）

2020/2021年度 第9回常任委員会

8月2日（月）

会報2021年7月号発送

8月7日（土）

会計監査

9月2日（木）

会報2021年8月号発送

9月18日（土）

2020/2021年度 第6回全国委員会

9月18日（土）-9月20日（月）

第52回全国大会

9月18日（土）

第1回全国委員会

10月12日（火）

会報2021年9月号発送

10月17日（日）

第1回常任委員会

11月17日（水）

会報2021年10月号発送

11月21日（日）

第2回常任委員会

11月25日（木）

会報2021年11月号発送

12月12日（日）

第3回常任委員会

12月19日（日）

第2回全国委員会

[2022年]

1月23日（日）

第4回常任委員会

2月15日（火）

会報2021年12月号発送

2月25日（金）

会報2022年1月号発送

3月4日（金）

会報2022年2月号発送

3月13日（日）

第5回常任委員会

3月21日（月祝）

第3回全国委員会

3月24日（木）

会報2022年3月号発送

4月24日（日）

第6回常任委員会

5月12日（木）

会報2022年4月号発送

5月27日（金）

会報2021年5月号発送

5月29日（日）-6月5日（日）

第7回常任委員会

会場：メール

6月18日（土）-6月25日（日）

第4回全国委員会

会場：メール

2. 地域グループ報告

報告項目は下記のとおりである。

- ① 2022年6月30日現在の会員数
- ② 運営体制
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- ④ グループ報の発行
- ⑤ 最近の総会等の報告
- ⑥ その他、特記事項

2.1 北海道地域グループ

- ① 2022年6月30日現在の会員数 10名
- ② 運営体制
- グループ長 磯本 善男 (千葉大学)
- 全国委員 河野 由香里 (北海道大学)
- 会 計 磯本 善男 (千葉大学)
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- 名 称 2021/2022年度第1回定例会
- 日 時 2021年8月9日 (月)
15:00-17:00
- 会 場 オンライン (Zoom)
- 内 容 次期体制についてなど
- 参加者数 6名
- 名 称 2021/2022年度第2回定例会
- 日 時 2021年11月28日 (日)
13:00-15:20
- 会 場 オンライン (Zoom)
- 内 容 会報特集記事テーマ選定など
- 参加者数 5名
- 名 称 2021/2022年度第3回例会
- 日 時 2022年2月11日 (金)
15:00-17:20
- 会 場 オンライン (Zoom)
- 内 容 全国委員会審議事項 (グループ
助成金・出版物委託販売) など
- 参加者数 3名
- 名 称 2021/2022年度第4回例会
- 日 時 2022年5月14日 (土)
15:00-17:00
- 会 場 オンライン (Zoom)
- 内 容 新入会員紹介など
- 参加者数 5名
- ④ グループ報の発行 なし
- ⑤ 最近の総会等の報告 なし
- ⑥ その他、特記事項
- 元会員の親族の方から北海道地域グループ
に寄附のお申し出をいただき受領した。

2.2 千葉地域グループ

- ① 2022年6月30日現在の会員数 12名
- ② 運営体制
- 地域グループの長 小笠原 玲子
- 全 国 委 員 加藤 晃一 (千葉大学)
- 会 計 小笠原 玲子
- 広 報 内山 光子
- 研 究 友田 暁子 (千葉県立中
央博物館)
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- 名 称 関東地域グループ合同例会
- 日 時 2022年2月5日 (土)
10:30-12:00
- 会 場 オンライン (Zoom)
- 講 師 森 いづみ氏 (県立長野図書
館)、上村 順一氏 (国立情報学
研究所)、安達 修介氏 (東京大
学)
- 内 容 講演会「大学図書館を飛び出し
た人たち」
- 参加者数 59名
- 備 考 千葉・東京地域グループ共催
- ④ グループ報の発行 なし
- ⑤ 最近の総会等の報告 なし
- ⑥ その他、特記事項 なし

2.3 東京地域グループ

- ① 2022年6月30日現在の会員数 85名
- ② 運営体制
- 地域グループの長 安達 修介
- 全 国 委 員 下山 朋幸
- 運 営 委 員 青山 史絵
- 小林 和実
- 下城 陽介
- 立原 ゆり
- 松原 恵
- 山口 友里子
- オブザーバ 上村 順一
- 澤木 恵
- 高瀬 洋子

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名称 第1回情報交換会
日時 2021年10月23日(土)
14:00-15:00
会場 オンライン(Zoom)
内容 全国大会の参加報告
参加者数 14名

名称 東京地域グループ・京都地域グループ合同企画「新図書館バーチャル見学会～大学内における位置づけと新たな役割～」
日時 2021年12月11日(土)
10:00-12:00
会場 オンライン(Zoom)
話題提供 原 香寿子氏(東京大学附属図書館)、長坂 和茂氏(京都大学桂図書館)
内容 東京大学総合図書館および京都大学桂図書館のオンライン見学会
参加者数 105名
備考 東京・京都地域グループ共催

名称 関東地域グループ合同例会
日時 2022年2月5日(土)
10:30-12:00
会場 オンライン(Zoom)
講師 森 いづみ氏(県立長野図書館)、上村 順一氏(国立情報学研究所)、安達 修介氏(東京大学)
内容 講演会「大学図書館を飛び出した人たち」
参加者数 59名
備考 千葉・東京地域グループ共催

名称 第2回情報交換会
日時 2022年6月18日(土)
14:00-15:30

会場 武蔵野プレイス・フォーラムA
内容 大学図書館への期待と不安(期待多めで)

参加者数 17名

④ グループ報の発行

回数 3回
巻号 253号-255号
発行月日 2021年11月-2022年6月

⑤ 最近の総会等の報告

名称 東京地域グループ総会
日時 2021年8月7日(土)
10:30-11:30
会場 オンライン(Zoom)
参加者数 13名
内容 ● 活動総括、2020/2021年度決算報告・会計監査報告
● 活動方針、2021/2022年度予算案、2021/2022年度地域グループ運営委員会及び会計監査人について
● 終了後、情報交換会を開催

⑥ その他、特記事項

会報『大学の図書館』2022年5月号の特集「学習指導要領改訂と『高大連携』」の企画編集を担当した。

2.4 東海地域グループ

① 2022年6月30日現在の会員数 20名

② 運営体制

地域グループ長 中島 慶子
全国委員 中川 恵理子
事務局 前田 勝典
財政 森川 雅人
広報 中村 直美

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名称 東海地域グループ12月例会
日時 2021年12月18日(土)
15:00-16:30
会場 オンライン(Zoom)

<p>内 容 全国大会・JLA大会・図書館総合展参加報告シェア会</p> <p>参加者数 4名</p> <p>備 考 例会後、オンライン忘年会、情報交換会を行った</p> <p>④ グループ報の発行 なし</p> <p>⑤ 最近の総会等の報告</p> <p>名 称 第53回東海地域グループ大会</p> <p>日 時 2021年10月23日(土) 13:30-17:00</p> <p>会 場 オンライン (Zoom)</p> <p>内 容 ● 2020/2021年度総括・決算 ● 2021/2022年度活動方針・予算・大学図書館研究会東海地域グループ役員について ● 大学図書館研究会東海地域グループ規約の改正について</p> <p>参加者数 6名(この他に委任6名)</p> <p>備 考 大会後、情報交換会を行った</p> <p>⑥ その他、特記事項 なし</p>	<p>ディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」</p> <p>日 時 2021年11月6日(土) 13:00-15:00</p> <p>会 場 オンライン (Zoom)</p> <p>講 師 入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)</p> <p>内 容 慶應義塾大学メディアセンターで務めあげ、2021年3月に定年退職された入江伸さんを京都にお呼びして、入江さんが描いていた近未来の大学図書館像について語っていただいた。</p> <p>参加者数 43名</p> <p>名 称 東京地域グループ・京都地域グループ合同企画「新図書館バーチャル見学会～大学内における位置づけと新たな役割～」</p> <p>日 時 2021年12月11日(土) 10:00-12:00</p> <p>会 場 オンライン (Zoom)</p> <p>講 師 原 香寿子氏(東京大学附属図書館)、長坂 和茂氏(京都大学桂図書館)</p> <p>内 容 東京大学総合図書館および京都大学桂図書館のオンライン見学会</p> <p>参加者数 105名</p> <p>備 考 東京・京都地域グループ共催</p> <p>名 称 関西3地域グループ合同例会「これからの学習支援：対面とオンライン、図書館員が知っておきたいこと」</p> <p>日 時 2022年2月27日(日) 14:00-17:00</p> <p>会 場 オンライン (Zoom)</p> <p>講 師 事例報告：廣田 桂氏(熊本大</p>
--	---

2.5 京都地域グループ

① 2022年6月30日現在の会員数 51名

② 運営体制

グループ代表 長坂 和茂
 全国委員 安東 正玄
 運営担当 内田 栞
 坂本 拓
 野間口 真裕
 原 健治
 藤谷 篤
 山形 知実
 山上 朋宏
 山下 ユミ
 若狭 あや

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名 称 大図研京都ワンディセミナー
 「入江 伸氏(元慶應義塾大学メ

学附属図書館)、講演・ワークショップ：大山 牧子氏 (大阪大学全学教育推進機構助教)

内 容 図書館員が学習支援を行っていくうえで、知っておきたいスキル、対面とオンラインの差異、オンラインの強みと課題など学んだ。

参加者数 31名

備 考 京都・大阪・兵庫地域グループ共催

名 称 大図研京都ワンディセミナー「明日から実践できるメディアユニバーサルデザインの基本」

日 時 2022年5月14日(土) 13:30-15:50

会 場 オンライン (Zoom)

講 師 阿部 浩之氏 (NPO法人メディア・ユニバーサル・デザイン協会 理事/株式会社イワタ取締役 第一営業部部長)

内 容 メディアユニバーサルデザインの基本について学んだ。

参加者数 40人

④ グループ報の発行

回 数 6回

巻 号 342-347

発行月日 2021年10月4日 - 2022年5月12日

⑤ 最近の総会等の報告 なし

⑥ その他、特記事項 なし

2.6 大阪地域グループ

① 2022年6月30日現在の会員数 30名

② 運営体制

地域グループの長 小村 愛美

全 国 委 員 吉田 弥生

事 務 局 伊賀 由紀子

会 計 吉田 弥生

地域グループ委員 小山 荘太郎

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名 称 10月例会「全国大会報告会」

日 時 2021年10月9日(土) 13:00-16:25

会 場 オンライン (Zoom)

内 容 第52回全国大会について、各自が参加した分科会等の内容を報告し合った。

参加者数 10名

名 称 関西3地域グループ合同例会「これからの学習支援：対面とオンライン、図書館員が知っておきたいこと」

日 時 2022年2月27日(日) 14:00-17:00

会 場 オンライン (Zoom)

講 師 事例報告：廣田 桂氏 (熊本大学附属図書館)、講演・ワークショップ：大山 牧子氏 (大阪大学全学教育推進機構助教)

内 容 図書館員が学習支援を行っていくうえで、知っておきたいスキル、対面とオンラインの差異、オンラインの強みと課題など学んだ。

参加者数 31名

備 考 京都・大阪・兵庫地域グループ共催

名 称 6月例会「コロナ3年目の春を語り合う」

日 時 2022年6月5日(日) 14:00-16:00

会 場 オンライン (Zoom)

内 容 新型コロナウイルス感染症による影響が始まった2020年の春から2年間の図書館の利用者動

向について情報交換し、今後の図書館のサービスのあり方などについて話し合った。

参加者数 7名

④ グループ報の発行

回数 1回

巻号 No. 6

発行月日 2021年7月9日

⑤ 最近の総会等の報告

名称 第6回地域グループ総会

日時 2021年7月17日(土)

15:00-17:00

会場 オンライン (Zoom)

参加者数 7名(この他に委任状8名)

内容 ● 2020年度活動報告、決算報告・監査報告
● 2021年度役員案および活動方針案、予算案についての協議

⑥ その他、特記事項 なし

2.7 兵庫地域グループ

① 2022年6月30日現在の会員数 20名

② 運営体制

地域グループ長 森藤 恵子

全国委員 井上 昌彦

財政部長 井上 俊子

編集部長 六車 彩都子

会計監査 杉原 奈美

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名称 8月例会「ハゲタカジャーナルについて考える」

日時 2021年8月29日(日)

15:30-17:00

会場 オンライン

内容 ハゲタカジャーナルについて、話題提供(井上昌彦氏(関西学院大学))の後、意見交換・討論を行った。
参加者は事前に指定文献「ハゲ

タカジャーナル問題: 大学図書館員の視点から」(千葉浩之氏)を読んで参加することとした。

参加者数 11名

名称 10月例会「支部報を読む会」

日時 2021年10月31日(日)

14:00-16:00

会場 オンライン

内容 過去の兵庫支部報を事前や当日に読み、過去の活動および大学図書館業界の動きについて、感想や情報を共有した。

参加者数 6名

名称 11月例会「箕面市立船場図書館と大阪大学外国学図書館 - 移転・閉館・これから -」

日時 2021年11月28日(日)

14:00-15:30

会場 オンライン

講師 日高 正太郎氏(大阪大学附属図書館)

内容 講師の日高正太郎氏より、大学図書館機能を兼ね備えた市立図書館を国立大学法人の大阪大学が指定管理者として管理運営するという国内初の事例について、サービス内容や運営体制、これまでの経緯・利点・課題などに関する1時間のご講演をいただいた。
その後、活発な質疑応答にてさらに詳しいお話をうかがうことができた。

参加者数 48名

名称 関西3地域グループ合同例会

「これからの学習支援: 対面とオンライン、図書館員が知って

おきたいこと」
 日 時 2022年2月27日(日)
 14:00-17:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 講 師 事例報告: 廣田 桂氏 (熊本大学
 附属図書館)、講演・ワーク
 ショップ: 大山 牧子氏 (大阪
 大学全学教育推進機構助教)
 内 容 図書館員が学習支援を行って
 いくうえで、知っておきたいスキ
 ル、対面とオンラインの差異、
 オンラインの強みと課題など学
 んだ。
 参加者数 31名
 備 考 京都・大阪・兵庫地域グループ
 共催

④ グループ報の発行 なし

⑤ 最近の総会等の報告

名 称 第43回地域グループ大会
 日 時 2021年8月29日(日)
 13:30-15:00
 会 場 オンライン
 内 容 決算・予算・役員人事・会報・
 グループの活動方針等につい
 て、検討を行った。

参加者数 10名

⑥ その他、特記事項

兵庫地域グループMLにて情報交換、イベ
 ント案内などを随時行った。

2.8 広島地域グループ

① 2022年6月30日現在の会員数 19名

② 運営体制

地域グループの長 沖政 裕治 (広島大学)
 全 国 委 員 楫 幸子 (安田女子大学)
 事 務 局 長 沖政 裕治 (広島大学)
 事 務 局 員 山下 真佑美 (広島大学)
 会 計 山下 真佑美 (広島大学)
 会 計 監 査 津村 光洋 (広島大学)
 西川 英治 (元広島経済

大学)
 編 集 長 石井 美絵 (広島文教大
 学)
 編 集 委 員 片山 智恵美 (広島都市
 学園大学)
 北井 由香 (島根県立大
 学)
 込山 祐佳里 (広島大学)
 永友 恵 (広島大学)

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名 称 7月研究会
 日 時 2021年7月25日(土)
 15:00-16:30
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 公共図書館サービスの現状とコ
 ロナ対策について
 参加者数 8名

名 称 10月研究会
 日 時 2021年10月23日(土)
 10:00-12:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 紀要発行事務とりポジットリ登録
 の可視化
 参加者数 6名

名 称 3月研究会
 日 時 2022年3月12日(土)
 10:00-12:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 著作権法改正 (図書館関係の権
 利制限規定の見直し) について
 備 考 17名

④ グループ報の発行

回 数 3回
 巻 号 230号-232号
 (電子版No. 41-43)
 発行月日 2021年10月1日、
 2022年1月1日、
 2022年6月15日

⑤ 最近の総会等の報告

名 称 広島地域グループ総会
 日 時 2021年7月25日(土)
 13:30-14:45
 会 場 オンライン (Zoom)
 参 加 者 9名
 内 容 会計報告、活動報告、予算案、
 役員選出、次期活動計画
 備 考 終了後、研究会を開催

名 称 12月例会
 日 時 2021年12月19日(日)
 14:00-16:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 資料受入関係(電子ブックの資
 産管理を中心に)
 発 表 者 川崎 陽奈氏
 備 考 16名

⑥ その他、特記事項 なし

2.9 九州地域グループ

① 2022年6月30日現在の会員数 35名

② 運営体制

地域グループ長 山下 大輔
 全 国 委 員 柿原 友紀
 事 務 局 坂本 里栄
 会 計 坂本 里栄
 企画サポーター 小野 未来子
 金子 芙弥
 川崎 陽奈
 廣松 亜矢子

会 報 編 集 平山 紀子
 会 計 監 査 西村 泰成

③ 例会・研究会・見学会等の活動報告

名 称 10月例会
 日 時 2021年10月24日(日)
 14:00-16:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 全国大会報告例会
 備 考 13名

名 称 11月例会
 日 時 2021年11月21日(日)
 14:00-16:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 JUSTICE(大学図書館コンソー
 シアム連合) について
 発 表 者 金子 芙弥氏
 備 考 13名

名 称 6月例会
 日 時 2022年6月19日(日)
 13:00-15:00
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 地域グループ会員情報交換会
 (1)「電子ブックの管理につい
 て」
 (2)「新型コロナウイルス感染
 症対応の状況について」
 備 考 13名

④ グループ報の発行 なし

⑤ 最近の総会等の報告

名 称 2021・2022年度地域グループ
 総会
 日 時 2021年9月5日(日)
 14:00-16:15
 会 場 オンライン (Zoom)
 内 容 ● 2020/2021年度 決算報告
 / 活動報告
 ● 組織報告 / 役員改選
 ● 2021/2022年度 活動方針・
 活動計画案
 ● 2021/2022年度 予算案 /
 会員への補助
 ● その他
 参加者数 17名(この他に委任状11名)

名 称 2021・2022年度地域グループ
 臨時総会
 日 時 2021年9月18日(土)-24日(金)

会 場 メール稟議
内 容 九州地域グループ会則改正につ
いて

参加者数 35名

⑥ その他、特記事項

「大学の図書館」2022年7月号の特集編集
を担当した。

3. 研究グループ報告

- ① 報告項目は下記のとおりである。2022
年6月30日現在の会員数
- ② 運営体制
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
- ④ グループ報の発行
- ⑤ 最近の総会等の報告
- ⑥ その他、特記事項

3.1 長期的研究グループ

3.1.1 学術基盤整備研究グループ

- ① 2022年6月30日現在の会員数 17名
- ② 運営体制
グループ長 野間口 真裕 (京都教育大学)
全国委員 田辺 浩介 (物質・材料研究機
構)
- ③ 例会・研究会・見学会等の活動報告
名 称 オンライン読書会
日 時 2021年7月4日 (日) -
2022年6月26日 (日)
(およそ2週間に1回の頻度で
開催)
会 場 オンライン (Zoom)
参加人数 毎回4-6名
備 考 読書会の題材は以下のとおり。
 - オープンサイエンス時
代の研究者プロフィール
サービス ([https://doi.
org/10.18919/jkg.71.5_
200](https://doi.org/10.18919/jkg.71.5_200))
 - 大学における研究デー
タポリシー策定のための

ガイドライン ([https://
rdm.axies.jp/sig/70/](https://rdm.axies.jp/sig/70/))

- About the Internet
Archive ([https://archive.
org/about/](https://archive.org/about/))
- Standing up for fairer
publishing practices
needn't hinder your
career ([https://www.
jisc.ac.uk/blog/standing-
up-for-fairer-publishing-
practices-neednt-hinder-
your-career-29-oct-
2021](https://www.jisc.ac.uk/blog/standing-up-for-fairer-publishing-practices-neednt-hinder-your-career-29-oct-2021))
- Library Carpentry: The
UNIX Shell ([https://
librarycarpentry.org/lc-
shell/](https://librarycarpentry.org/lc-shell/))

- ④ グループ報の発行 なし
- ⑤ 最近の総会等の報告 なし
- ⑥ その他、特記事項

「大学の図書館」2022年3月号の特集「メ
タデータの識別子」の編集を担当した。

3.2 萌芽的研究グループ

今年度、萌芽的研究グループは設置されて
いない。

4. 常任委員会等

常任委員会では、常設の5委員会 (全国大
会、研究企画、会報編集、会誌編集、広報)、
五十周年記念事業関連の2委員会 (記念出版
物編集、海外図書館研修ツアー検討)、1WG
(全国大会)、および事務局において会務を行
い、各課題に取り組んだ。

委員会およびWGの長は常任委員が務め、
主として常任委員で構成される。また、会務
をサポートする運営サポート会員を会員から
公募することによって、運営の強化を図って
いる。

常任委員会の体制、各委員会、各WGおよび事務局の活動報告は以下のとおりである。

4.1 常任委員会等の体制

4.1.1 常任委員会

会長（全国委員会会長）：呑海沙織

副会長：赤澤久弥

全国大会委員会：赤澤、上村、中筋知恵+、
研究企画委員会：小山荘太郎、呑海、運営サ
ポート会員

会報編集委員会：上村、北川正路、和知剛、
北海道地域グループ*、東京地域グループ*、
京都地域グループ*、大阪地域グループ*、
兵庫地域グループ*、九州地域グループ*

会誌編集委員会：和知、赤澤、北川、運営サ
ポート会員

広報委員会：中筋+、運営サポート会員

*本年度より、小委員会を委員会とすること
とした。

4.1.2 五十周年記念事業関連委員会

記念出版物編集委員会：北川、上村、小山、
呑海、運営サポート会員

海外図書館研修ツアー検討委員会：中筋+、
呑海、運営サポート会員

4.1.3 WG

全国大会WG：赤澤、上村

4.1.4 事務局

事務局長：上村

出版担当：上村、市村省二*、清水滋文*、瀧
桂子*、仲尾正司*、森永瑞穂*

会計担当：上村、澤木恵+

会費徴収担当：渡邊伸彦+、赤澤、澤木+

組織担当：上村、青山史絵+

ML担当：磯本善男+

注1) 先頭は、その組織の長

注2) 初出のみ氏名を記載。初出以外は氏

のみ記載

注3) +は、特定常任委員

注4) *は、運営サポート会員

注5) #は、オブザーバ

5. 常任委員会等の活動報告

5.1 常任委員会

5.1.1 全国大会委員会

全国大会委員会は、毎年開催する全国大会
の企画・運営を担当している。

2021/2022年度の全国大会は、第52回全
国大会として、去る2021年9月18日（土）
から9月20日（月祝）の3日間、前回に引き
続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止の
ため、オンライン形式で開催した。

計12名からなる全国大会実行委員会に
よって、前回縮小したプログラムをおおよそ
従来に復した内容で企画・運営を行い、合計
136名の出席者があった。会員総会のほか、
研究発表、8つの課題別分科会、シンポジウ
ム及び交流会等を実施し、成功裏に終了する
ことができた。また、14社からの企業協賛
を得た。

5.1.2 研究企画委員会

研究企画委員会は、全国大会以外の研究活
動を担当している。

① 大図研オープンカレッジ（DOC）

大図研オープンカレッジ（以下、「DOC」
という）は大図研の広報および新入会員の獲
得を目的として、参加対象を会員に限定しな
い方針で行っている。第30回（2021/2022
年度）のDOCは、日本図書館研究会大学図
書館研究グループとの共催で「情報技術の学
び方 ～ノンエンジニアズ・ミートアップ～」
というテーマで昨年引き続きオンライン形
式（Zoom）で2022年5月21日（土）14時
00分から16時00分まで開催した。

パネルディスカッション形式で実施した。
講師と内容は以下のとおりである。

- 田辺 浩介氏 (物質・材料研究機構)
下城 陽介氏 (東京大学附属図書館)
佐藤 知生氏 (神戸大学附属図書館)
- 話題提供 (下城氏、佐藤氏)
パネルディスカッション (田辺氏、下城氏、佐藤氏)

今回も新型コロナウイルス感染症拡大が続く中の開催となったが、会員・非会員を含め全国から参加があり、参加者数は40名であった。なお、イベント管理および参加費集金について、Peatixを使用した。

② 研究グループ

前年度に引き続き「学術基盤整備研究グループ」(長期的研究グループ)が活動を行った。メンバーは各地の会員から構成され、ウェブ上での情報共有や意見交換が主な活動である。2021年9月開催の第52回全国大会(オンライン)の第5分科会(学術基盤整備)を担当した。なお、萌芽的研究グループについては応募がなかったため、設置されなかった。

③ オンライン交流会

前年度に引き続き、オンライン交流会を実施した。今年度については、原則として隔月開催とした。

5.1.3 会報編集委員会

月刊誌として12回の発行を行った。

2021年7月号以降は以下の特集のもと刊行した。

- 7月号 子育てとキャリア形成 (担当：九州地域グループ)
- 8月号 貴重資料を保存する (担当：兵庫地域グループ)
- 9月号 専門分野の図書館員たち (担当：京都地域グループ)
- 10月号 全国大会フラッシュ号 (担当：会報編集委員会)
- 11月号 大学統合と大学図書館 (担当：大阪地域グループ)

- 12月号 大学図書館研究会第52回全国大会記録[全国大会記録号] (担当：会誌編集委員会)
- 1月号 2021年この1作品 (1冊、1枚、1曲、1タイトル、etc.) (担当：会誌編集委員会)
- 2月号 バーチャルで魅せる (担当：北海道地域グループ)
- 3月号 メタデータの識別子 (担当：学術基盤整備研究グループ)
- 4月号 情報技術の学び方 (担当：研究企画委員会)
- 5月号 学習指導要領改訂と「高大連携」 (担当：東京地域グループ)
- 6月号 大学図書館研究会第53回全国大会開催要綱[全国大会議案書号] (担当：会報編集委員会)

EBSCOへの会報データ提供は、条件が変わったため(1箇年のエンバゴの付与)、保留の状態である。

5.1.4 会誌編集委員会

「大学図書館研究会誌」第47号を2022年4月に刊行した。第47号から会員には電子媒体での無料頒布を実施した。刊行が大幅に遅れた。

また第47号を以って当面のあいだ、(査読)論文の投稿の受付を停止することとなった。

5.1.5 広報委員会

広報委員会は、ウェブとSNSによる広報を担当した。

- 大図研ウェブ (<https://www.daitoken.com/>)による情報発信を引き続き行った。大図研ウェブでは、大図研のイベント案内や会報の目次情報と記事データベース、全国委員会や常任委員会、研究活動の記録、刊行物案内等を掲載した。

- 会員向けの出版物のデジタル頒布のため、発行の都度、ウェブ上に会報PDFを掲載するとともに、会員への掲載通知を行った。
- 会報PDFの1年間のエンバゴ終了後、オープンアクセスとした。公開用ページにはトップページのバナーから手軽にアクセスできるように設定した。
- TwitterやFacebookなどのSNSにて大図研の諸活動の広報を行った。

5.2 五十周年記念事業関連委員会

5.2.1 記念出版物編集委員会

記念出版物に掲載する原稿のうち、各支部・地域グループに関する原稿をとりまとめた。各地域グループにて調査した支部時代から現在の地域グループ時代までの委員組織の変遷を一覧形式にまとめたほか、各地域・研究グループに活動の歴史の紹介文を執筆して提出いただいた。

新型コロナウイルス感染症拡大により、会報のバックナンバーを、所蔵館にて閲覧することが困難となり、記録資料の作成、大図研の沿革に関する文章作成が進まず、年度内の発行はできなかった。

5.2.2 海外図書館研修ツアー検討委員会

新型コロナウイルス感染症拡大によりツアーの中止を決定した。

五十周年記念としての海外図書館研修ツアー検討委員会の役割は終了したため、当委員会は2021/2022年度をもって解散する。

5.3 WG

5.3.1 全国大会WG

全国大会WGは、①全国大会の円滑な運営のための実行委員会方式の安定的な継続、②全国大会運営マニュアルの整備の2つの目標に基づき活動を行っている。2021/2022年度

も、実行委員会方式に抛り、全国大会委員会及び全国大会実行委員会と連携して活動を行った。また、全国大会の運営マニュアル化を企図して、全国大会実行委員会でbacklogを導入し、継続して活用することで、オンライン開催に係るノウハウを蓄積した。

5.4 事務局

5.4.1 事務局

① 全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため、4回の全国委員会を開催した。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全てオンラインもしくはメールでの会議とした。

② 常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため、ほぼ月に1回、常任委員会を開催した。委員の負担を軽減するために、原則として報告事項は書類での報告とし、審議事項を中心に議論を行うことによって、会議時間を短縮した。

③ 大図研出版物の作業手順見直し

引き続き、大図研出版物の製版・印刷・発送作業を見直した。

④ 大図研ウェブサーバの見直し

大図研のウェブサーバで、グループ毎にセキュリティにコンテンツが制御できる運用方法を検討したが、アカウントの設定等検討課題が発生し、抜本的な見直しはできなかった。

5.4.2 事務局出版担当

大図研出版部として、大図研出版物の機関・個人への販売を行った。2022年6月30日現在の継続購読数は、会報152件161部、会誌78件87部である。

出版物の価格改定および販売方法（販売対象者/購読期間/購読料請求時期）の見直しに伴う対応を行った。

出版物の販売および販売管理のアウトソーシングに向けての検討・準備を行った。

事務局会計担当から事務局出版担当に、会

報の印刷・発送委託等にかかる支払い業務を移管した。

5.4.3 事務局会計担当

事務局会計担当は、事務局内の各担当と連携して経理業務を行った。

また、業務の合理化および健全化を推進する一環として帳簿を整理し、不明金の洗い出しと精算を行った。

5.4.4 事務局会費徴収担当

事務局会費徴収担当では、会費の收受、納入状況の管理のほか、所定スケジュールに沿って、地域グループへのグループ活動費の送金、次年度会費の納入依頼、未納者や除籍者への督促等を行った。その際、事務局組織担当および事務局会計担当と連携して業務を遂行した。

なお、経費と作業のコスト削減を目的に、前年度試行的に開始した会費納入依頼や督促を主にメールで行う方式を確立した。また、納入不能と見なされる未納会費2件について、全国委員会に諮って処理した。

5.4.5 事務局組織担当

事務局組織担当は、会員の入退会の手続き、会員名簿やメンバーリストの維持・管理を行った。

会員に係る入退会の処理フローに則り、迅速な事務処理、各グループとの正確な情報共有に努めた。

出版物のデジタル頒布に伴い、新規会員へのアクセス情報の周知、アクセス情報を失念した会員への対応を行った。

会員情報に変更があった場合の対応、また新規会員募集について、会報に記事を掲載し周知に努めた。

【第2号議案】

第52期（2021/2022年度）決算報告・会計監査報告

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は、マイナスであることを表す。
- 収入の部の「▲」は、予算額に達していない状態であることを示す。
- 支出の部の「▲」は、予算額以上に支出があった状態であることを示す。
- 備考欄の注記は基本的には決算額に対しての説明である。

1. 2021/2022年度一般財政決算報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	4,428,211	4,428,211	0	
会費	1,765,000	1,700,000	60,000	注 ¹
雑収入	185,960	10,000	180,960	注 ²
出版財政より繰入	779,624	0	779,624	注 ³
大会基金より繰入	127,664	0	127,664	
合計	7,286,459	6,138,211	0	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
印刷費	589,772	20,000	▲ 569,772	注 ⁴
発送委託費	20,754	0	▲ 20,754	注 ⁵
通信費	228,880	150,000	▲ 78,880	注 ⁶
交通費	0	450,000	450,000	注 ⁷
編集費	9,000	32,000	23,000	注 ⁸
助成金	137,000	137,000	0	注 ⁹
研究活動費	20,000	140,000	120,000	注 ¹⁰
会議費	29,238	77,000	47,762	注 ¹¹
消耗品費	6,388	10,000	3,612	注 ¹²
雑費	53,041	140,000	86,959	注 ¹³
予備費	0	4,982,211	4,982,211	
次年度繰越	6,192,386	0	▲ 6,192,386	
合計	7,286,459	6,138,211	▲ 1,148,248	

【注】

¹ 6月末時点の累計額、353名分。うち、前納（2022/2023年度以降）分165名、当年度（2021/2022年度）分159名、前年度（2020/2021年度）以前分29名。予算額は会員340名分

² 地域文化研究グループより研究活動費返金（30,000円）、全国大会実行委員会より第52回全国大会チラシ封入費用精算、会員寄附、銀行利子、大図研オープンカレッジ参加費、立替払い精算時の過払い金返金（32,031円）、口座残高超過分の繰入（一般財政・大会基金・50周年基金・地域グループ活動費預り金の各残高の合計額を各口座の残高が上回っていたため、差額114,811円として繰入）

- ³ 契約の都合上、2021年12月号までの『大学の図書館』（以下、会報）発行にかかる費用を予算措置のなかった一般財政から支出したため、2021年6-12月号の会報印刷費589,759円、会報発送委託費19,110円、会報発送費170,755円を出版財政より繰入
- ⁴ 会報2021年6-12月号印刷費、会員通知用宛名ラベル・かがみ等印刷費
- ⁵ 会報2021年6-12月号封入費宛名ラベル作成費、第52回全国大会チラシ封入費用
- ⁶ 会報2021年6-12月号封入発送費、会報執筆御礼郵送費、資料等郵送費、会費納入依頼等会員通知郵送費、大図研ウェブページ関連費用（サーバレンタル費、ドメインネーム費）
- ⁷ 全国委員会、常任委員会、会計監査ともにすべてオンライン開催のため、交通費なし
- ⁸ 会報2021年7-9月号、2022年5月号非会員執筆者謝礼
- ⁹ 地域グループ会員70名以上35,000円×1（東京）、地域グループ会員69-30名18,000円×3（京都・大阪・九州）、地域グループ会員29-20名12,000円×2（東海・兵庫）、地域グループ会員19-5名8,000円×3（北海道・千葉・広島）
- ¹⁰ 長期的研究グループ20,000円×1
- ¹¹ Zoom利用料、Office365利用料（どちらも年払）
- ¹² 出版物ID/PW通知はがき用目隠しシール、会計書類整理・保管用品
- ¹³ 銀行口座振込手数料、立替払い精算時の過払い金

2. 2021/2022年度大会基金決算報告

100万円を超えた場合は、一般財政へ繰り入れる。

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	900,000	900,000	0	
一般財政より戻り	227,664	100,000	127,664	注 ¹⁴
雑収入	0	0	0	
合計	1,127,664	1,000,000	127,664	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	100,000	350,000	250,000	注 ¹⁵
一般財政へ支出	127,664	0	▲127,664	
雑費	0	0	0	
次年度繰越	900,000	650,000	▲250,000	
合計	1,127,664	1,000,000	▲127,664	

【注】

¹⁴ 第52回大会（オンライン）から戻り分

¹⁵ 第53回全国大会の実施形態がオンライン開催となり、必要経費や参加費設定の見直しが生じたため、大会基金からの支出金額も変更

3. 2021/2022年度出版財政決算報告 (収入の部)

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	3,805,194	3,805,194	0	
刊行物収入	1,470,020	1,350,000	120,020	注 ¹⁶
広告料収入	0	0	0	
雑収入	28	0	28	注 ¹⁷
合計	5,275,242	5,155,194	120,048	

(支出の部)

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
印刷費	486,200	1,023,680	537,480	注 ¹⁸
発送委託費	13,166	33,660	20,494	注 ¹⁹
通信費	187,339	343,700	156,361	注 ²⁰
消耗品費	19,862	10,000	▲9,862	注 ²¹
宣伝費	0	10,000	10,000	
会議費	0	0	0	
雑費	1,430	10,000	8,570	注 ²²
組入金	589,759	0	▲589,759	注 ²³
会報発送委託費	19,110	0	▲19,110	注 ²⁴
会報発送費	170,755	0	▲170,755	注 ²⁵
出版物販売委託費	0	100,000	100,000	
予備費	0	3,624,154	3,624,154	
次年度繰越	3,787,621	0	▲3,787,621	
合計	5,275,242	5,155,194	▲120,048	

【注】

¹⁶ 『大学の図書館』（以下、会報）1,308,900円、『大学図書館研究会誌』（以下、会誌）146,240円、JLA販売委託本14,880円

¹⁷ 預金利息

¹⁸ 会報2022年1-5月号、会誌47号、封筒など

¹⁹ 会報2022年1-5月号

²⁰ 会報2022年1-5月号、会誌47号、請求書送料など

²¹ 角印、OPP袋、ラベル用紙など

²² 振込手数料、ATM手数料

²³ 会報2021年6-12月号印刷費。一般財政に組入

²⁴ 会報2021年6-12月号分。一般財政に組入

²⁵ 会報2021年6-12月号分。一般財政に組入

4. 2021/2022年度五十周年事業基金報告

〈収入の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (決算－予算)	備考
前年度より繰越	895,514	895,514	0	
雑収入	0	0	0	
合計	895,514	895,514	0	

〈支出の部〉

費目	決算額	予算額	差引額 (予算－決算)	備考
記念出版物編集委員会	0	785,514	785,514	
海外図書館研修ツアー 検討委員会	0	110,000	110,000	
次年度繰越	895,514	0	▲ 895,514	
合計	895,514	895,514	0	

5. 2021/2022年度会計監査報告

大学図書館研究会 2021/2022年度 会計監査報告

2021/2022年度一般財政・出版財政に係る決算及び関係書類について監査した結果、いずれも適正に執行されていることを確認しましたので、ご報告いたします。

【監査所見】

前年度監査所見において要望した監査資料群の説明資料については、今年度は事前に提示され、効率的に監査を進めることができた。今後も事前に説明を提示することをお願いしたい。また、表計算ソフトから作成した資料は、確認が容易となるように表計算ソフトのファイルも提示してほしい。

また、一般財政収支簿は、各口座や現金等の所持金額が一覧できるように工夫された。そのことにより、過去の齟齬の解消に繋がったことは担当者の功績として大いに評価する。

[一般財政]

会費徴収においては、滞納会費の督促や超過納入者への連絡等、細やかな対応を評価する。会員からの会費の誤送金などにより一時的に入金額と計上額に齟齬が生じる場合は、その説明も資料に明記願いたい。


新型コロナ禍において、総会等をオンラインで開催したことで経費の節減につながっている。今後は、オンラインでの成果を踏まえながら、コロナ終息後に向けたオンラインと対面併用の運営についても効率的に実施できるよう検討してほしい。

[出版財政]

業務のアウトソーシングや契約開始時期の変更等の工夫により、会の安定的な運営に貢献されていることを評価する。また、大図研出版物の購読者を増やし、広告収入を含め、収入増となる方策を検討してほしい。

2022年7月31日

大学図書館研究会会計監査人

鈴木宏子 伊賀由紀子 

【第3号議案】 第53期（2022/2023年度）活動計画面案

地域グループ及び研究グループを核として活動を行う。地域グループは、北海道、千葉、東京、東海、京都、大阪、兵庫、広島、九州の9グループで構成される。

研究グループは、長期的研究グループとして学術基盤整備研究グループが前年から活動を継続している。

会費は、前年度に引き続き、一括徴収方式を採る。2016/2017年度より前（支部制）の未徴収会費については引き続き、地域グループが責任をもって徴収する。

1. 常任委員会

常任委員会の運営方法を引き続き検討する。原則として、オンライン会議とする。

常任委員は、特定常任委員や運営サポート会員の協力のもと、効率的かつ円滑な運営を心がける。

1.1 全国大会委員会

引き続き、実行委員会形式で全国大会を企画・運営する。その際、広く会員から実行委員を募ることにより、企画・運営に関わる機会を提供する。また、オンサイトとオンラインのハイブリッド開催も想定して、安定した開催に努めながら、運営ノウハウを蓄積する。

1.2 研究企画委員会

大図研オープンカレッジ企画については、地域グループ・研究グループとの共催を含めて運営サポート会員の募集を行い、魅力的な企画運営と安定的な体制づくりを継続する。

地域グループ・研究グループは年度毎の募集を行う。オンライン形式での会議や研修会企画などを含めた活動を支援する。

1.3 会報編集委員会

① 会報のあり方を特集企画担当者およびグループと引き続き共有する。

② 確実な発行サイクルを堅持できるよう引き続き行程を見直す。

③ 会員からの投稿をより積極的に呼び掛ける。

④ 目次情報の正規化に努める。

1.4 会誌編集委員会

2022/2023年度は、「大学図書館研究会誌」第48号の発行を目指す。

1.5 広報委員会

- 大学図書館研究会ウェブサイトの利便性向上を目指し、サイトのリニューアルを検討する。
- ウェブサイト、メーリングリストおよびSNSの活用を通じて、大図研の迅速な情報提供に努めるとともに、新会員獲得の一助となる情報の提供を行う。

2. 五十周年記念事業

2.1 記念出版物編集委員会

記念出版物を年度内に発行することを目標として、各種記録資料の作成、大図研の沿革に関する文章作成・寄稿依頼を、スケジュールを立てて進める。全国大会の課題別分科会「大学図書館史」での報告の内容からの掲載も考えたい。

3. ワーキンググループ

3.1 全国大会WG

オンサイトとオンラインのハイブリッド開催を想定して、従来の内容に加えて、ハイブ

リット方式に対応できるよう、運営マニュアルの整備を継続する。

4. 事務局

4.1 事務局

① 全国委員会の開催

大図研の運営についての諸決定を行うため、全5回程度の全国委員会を引き続き開催する。原則としてオンライン開催とする。

② 常任委員会の開催

日常的な業務を遂行するため、引き続き常任委員会を開催する。原則としてオンライン開催とし、審議すべき事項を絞り込んで委員の負担軽減に務める。

③ 大図研出版物の作業手順見直し

引き続き、大図研出版物の製版・印刷・発送作業を見直し、より低コストで省力化が図られるよう、事務局出版担当及び事務局組織担当と協議の上、検討する。

④ 大図研会員への勧誘

大図研およびグループが開催する行事に、入会案内を配布する等、積極的に大図研の存在をアピールする。

4.2 事務局出版担当

大図研出版部として、引き続き大図研出版物の機関・個人への販売を行う。

2023年発行分より出版物の販売および販売管理のアウトソーシングを行うべく、引き続き検討・準備を進める。

2023年10月からのインボイス制度施行に向けて、必要な検討・準備を進める。

出版物の在庫処分を実施する。

4.3 事務局会計担当

引続き、事務局内の各担当と連携し、業務を遂行する。

また、立替払等について早期の申請を促し、予算執行状況を可視化するとともに、伝票類の散逸を防ぎ、業務の合理化および健全化を

推進する。

4.4 事務局会費徴収担当

従来の業務フローを確実に実施するとともに、納入率の向上を目指す方策を引き続き検討する。

4.5 事務局組織担当

事務局組織担当業務（会員に係る手続き、会員名簿やメンバーリストの維持・管理、地域および研究グループとの会員情報共有など）を迅速かつ確実に実施する。

会員情報の変更があった場合の対応方法について、会報やメンバーリストで定期的に周知し、会員情報のアップデートに努める。

【第4号議案】 第53期（2022/2023年度）予算案

【凡例】

- 全ての表の単位は「円」である。
- 差引額の「▲」は、マイナスであることを表し、前年度予算額よりも少額である状態であることを示す。

1. 2022/2023年度一般財政予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	6,192,386	4,428,211	1,764,175	4,428,211	
会費	1,700,000	1,700,000	0	1,760,000	注 ²⁶
雑収入	120,000	10,000	110,000	190,960	注 ²⁷
出版財政より繰入	0	0	0	779,624	注 ²⁸
大会基金より繰入	0	0	0	127,664	
合計	8,012,386	6,138,211	1,874,175	7,286,459	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
印刷費	20,000	20,000	0	589,772	注 ²⁹
発送委託費	0	0	0	20,754	
通信費	250,000	150,000	100,000	228,880	注 ³⁰
交通費	450,000	450,000	0	0	注 ³¹
編集費	32,000	32,000	0	9,000	注 ³²
助成金	205,000	137,000	68,000	137,000	注 ³³
研究活動費	140,000	140,000	0	20,000	注 ³⁴
会議費	77,000	77,000	0	29,238	注 ³⁵
消耗品費	10,000	10,000	0	6,388	注 ³⁶
雑費	110,000	140,000	▲ 30,000	53,041	注 ³⁷
予備費	6,718,386	4,982,211	1,736,175	0	
次年度繰越	0	0	0	6,192,386	
合計	8,012,386	6,138,211	1,874,175	7,286,459	

【注】

²⁶ 会員340名分で算出²⁷ 全国大会収入、大図研オープンカレッジ参加費、旧埼玉地域グループ寄附等²⁸ 出版財政より繰入がなくなったので、次年度に本費目を削除する²⁹ 会員通知用宛名ラベル印刷費等³⁰ 各種資料送料、会費納入通知送料等³¹ 全国委員会250,000円×1回、常任委員会40,000円×2回、会計監査120,000円×1回³² 非会員会報執筆者への謝礼1,000円×12、外部査読費20,000円³³ 地域グループ会員70名以上52,000円×1（東京）、地域グループ会員69-30名27,000円×3（京都・

大阪・九州)、地域グループ会員29-20名18,000円×2(東海・広島)、地域グループ会員19-5名12,000円×3(北海道・千葉・兵庫)。なお、東京地域グループ増額分の17,000円は東京地域グループから辞退の連絡があり、同額を、希望のあった兵庫地域グループと広島地域グループに追加支給する。この措置は、2021/2022年度第3回全国委員会(2022年3月21日(月祝)開催)の審議により決定した。

³⁴ 長期的研究グループ20,000円×1、萌芽的研究グループ10,000円×0、講演等テープ起こし30,000円、関東・近畿合同例会テープ起こし20,000円×2、大図研オープンカレッジ関係費20,000円、その他研究活動費等

³⁵ オンライン会議費2,000円×12ヶ月分、会場費4,000円×(全国委員会1回+常任委員会2回+会計監査1回)、全国大会backlog費、会議予備費

³⁶ 会報宛名ラベル代等

³⁷ 大図研ウェブのマルチユーザ化40,000円、会報印刷費・交通費等口座振込手数料等10,000円、表彰制度設計等20,000円、事務局外注費40,000円

2. 2022/2023年度大会基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	900,000	900,000	0	900,000	
一般財政より戻り	100,000	100,000	0	227,664	注 ³⁸
雑収入	0	0	0	0	
合計	1,000,000	1,000,000	0	1,127,664	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
今年度大会会計へ支出	0	0	0	0	
来年度大会会計へ支出	500,000	350,000	150,000	100,000	注 ³⁹
一般財政へ支出	0	0	0	127,664	
雑費	0	0	0	0	
次年度繰越	500,000	650,000	▲150,000	900,000	
合計	1,000,000	1,000,000	0	1,127,664	

【注】

³⁸ 第53回全国大会(オンライン)から戻り分

³⁹ 第54回全国大会準備金

3. 2022/2023年度出版財政予算案

(収入の部)

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	3,787,621	3,805,194	▲ 17,573	3,805,194	
刊行物収入	848,000	1,350,000	▲ 502,000	1,470,020	注 ⁴⁰
広告料収入	0	0	0	0	
雑収入	0	0	0	28	
合計	4,635,621	5,155,194	▲ 519,573	5,275,242	

(支出の部)

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
印刷費	1,060,000	1,023,680	36,320	486,200	注 ⁴¹
発送委託費	34,000	33,660	340	13,166	注 ⁴²
通信費	350,000	343,700	6,300	187,339	注 ⁴³
消耗品費	10,000	10,000	0	19,862	
宣伝費	10,000	10,000	0	0	
会議費	0	0	0	0	
雑費	10,000	10,000	0	1,430	
組入金	0	0	0	589,759	注 ⁴⁴
会報発送委託費	0	0	0	19,110	注 ⁴⁵
会報発送費	0	0	0	170,755	注 ⁴⁶
出版物販売委託費	150,000	100,000	50,000	0	
予備費	3,011,621	3,624,154	▲ 612,533	0	
次年度繰越	0	0	0	3,787,621	
合計	4,635,621	5,155,194	▲ 519,573	5,275,242	

【注】

⁴⁰ 会報『大学の図書館』41・42巻ほか840,600円＋『大学図書館研究会誌』48号7,020円

⁴¹ 会報印刷費@318×月平均印刷213部×12ヶ月分×消費税1.1、会誌印刷費150,000円×1、封筒等印刷費10,000円

⁴² 宛名ラベル単価@16×月平均発送160部×12ヶ月分×消費税1.1

⁴³ 会報発送単価@135×月平均発送160部×12ヶ月分×消費税1.1、印刷残部出版部宛返送単価@1,000×12ヶ月分×消費税1.1、会誌発送費、請求書送料等

⁴⁴ 一般財政への繰入がなくなったので、次年度に本費目を削除する

⁴⁵ 一般財政への繰入がなくなったので、次年度に本費目を削除する

⁴⁶ 一般財政への繰入がなくなったので、次年度に本費目を削除する

4. 2022/2023年度五十周年事業基金予算案

〈収入の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
前年度より繰越	895,514	895,514	0	895,514	
雑収入	0	0	0	0	
合計	895,514	895,514	0	895,514	

〈支出の部〉

費目	今年度予算額	前年度予算額	差引額 (今年度予算－ 前年度予算)	前年度決算額	備考
記念出版物編集 委員会	895,514	785,514	110,000	0	注 ⁴⁷
海外図書館研修 ツアー検討委員会	0	110,000	▲ 110,000	0	
大学図書館問題 研究会の名称に 係る検討委員会	0	0	0	0	
次年度繰越	0	0	0	895,514	
合計	895,514	895,514	0	895,514	

【注】

⁴⁷ 記念出版物刊行費、会議費等

【第5号議案】

第53期（2022/2023年度）役員案

●全国委員（22名）

項番	氏名	所属	グループ名	委員種別
1	青山史絵	東洋英和女学院大学	東京	常任（特定）
2	赤澤久弥	大阪大学	京都	常任
3	有馬良一	神戸大学	兵庫	常任
4	磯本善男	千葉大学	北海道	常任（特定）
5	上村順一	国立情報学研究所	東京・学術基盤整備	常任
6	柿原友紀	熊本大学	九州	地域グループ推薦
7	楫幸子	安田女子大学	広島・学術基盤整備	地域グループ推薦
8	加藤晃一	千葉大学	千葉	地域グループ推薦
9	北川正路	東京慈恵会医科大学	東京	常任
10	小林泰名	北海道大学	北海道	地域グループ推薦
11	小山荘太郎	三重大学	東海・京都・大阪・兵庫	常任
12	澤木恵	東京海洋大学	東京・学術基盤整備	常任（特定）
13	下山朋幸	(所属先非公開)	東京・学術基盤整備	地域グループ推薦
14	田辺浩介	物質・材料研究機構	東京・学術基盤整備	研究グループ推薦
15	徳田恵里	紀伊國屋書店	兵庫	地域グループ推薦
16	呑海沙織	筑波大学	東京	常任
17	中川恵理子	金沢学院大学	東海	地域グループ推薦
18	中筋知恵	小樽商科大学	北海道	常任（特定）
19	山上朋宏	京都大学	京都	地域グループ推薦
20	吉田弥生	大阪大学	大阪	地域グループ推薦
21	渡邊伸彦	京都大学	京都	常任（特定）
22	和知剛	郡山女子大学	学術基盤整備	常任

●会計監査（2名）

項番	氏名	所属	グループ名
1	伊賀由紀子	大阪公立大学	大阪
2	立原ゆり	東京大学	東京

【参考】大学図書館研究会会則（抄）

（全国委員会）

第9条 この会に会長1名を含む委員15名以上30名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。

- 2 全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は会長を互選します。
- 3 全国委員は会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。
- 4 全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。

大学図書館研究会の会則改正に係る修正案

昨年度（2021/2022年度）開催の第52回会員総会で、当研究会が2021年1月1日より「大学図書館研究会」と改称したことを承けた会則改正を審議し、承認されました。しかしながら、会員総会中、会員から以下の意見がありました。

- ① 附則文言の修正
- ② 会長の設置規定の記述位置修正
- ③ 本文中の「より」「から」の用法修正

この修正提案について、2021/2022年度第2回全国委員会（2021年12月19日（日）開催）及び同年度第3回全国委員会（2022年3月21日（月祝）開催）にて審議し、修正提案どおりに修正すべきである旨の決議がなされたため、再度審議をお願い申し上げます。

別紙として、新旧対照表を付します。

大学図書館研究会会則改定（案）

第1章 名称

第1条 この会の名称を「大学図書館研究会（Japanese Academic Library Association）」とします。

第2章 目的および事業

第2条 この会は、会員相互の理解と協力を促進し、大学図書館の発展に寄与することを目的とします。

第3条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業をおこないます。

- (1) 会報および研究会誌の発行
- (2) 共同研究、調査
- (3) 全国大会の開催
- (4) その他この会に必要な事業

第3章 会員

第4条 この会は個人加入の全国単一組織です。

第5条 この会の目的に賛同する大学図書館員を主体として組織します。ただし、その他この会の目的に賛同するものは、会員になることができます。

第6条 会員はこの会のすべての事業に参加し、会報および研究会誌の頒布をうけることがで

きます。

第4章 運営

(会長)

第7条 会長はこの会を代表し、会務を主宰します。会長の任期は1年とし再任をさまたげません。

2 全国委員会に副会長をおくことができます。副会長は、全国委員のうちから会長が指名します。

(全国委員会)

第8条 この会に会長1名を含む委員15名以上30名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。

2 全国委員会は、会長が招集し開かれます。

3 全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は会長を互選します。

4 全国委員は会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。

5 全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。

(常任委員会)

第9条 全国委員会に若干名の委員による常任委員会をおき、通常の会務を担当します。

2 常任委員会は、会長が招集し開かれます。

3 常任委員は通常の会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。

4 常任委員会に特定常任委員をおくことができます。特定常任委員は特定の通常会務を分担し、常任委員会および全国委員会に出席する義務を負いません。

5 常任委員会に事務局をおきます。

(会員総会)

第10条 この会の最高機関を会員総会とし、会員はすべてこの会員総会に出席し、発言し、議決に加わる権利を有します。

第11条 会員総会は年1回会長が招集し開かれます。ただし、全国委員会が必要としたとき、もしくは会員の3分の1以上の要求があるときは臨時に会員総会を開くことができます。

2 会員総会の開催はその日から30日以前に提出議案を明記した文書をもって、全会員に通知しなければなりません。さらに都合により出席できない会員の意見も会員総会に反映するよう努めなければなりません。

3 会員総会は活動方針、予算、決算、役員の選出およびその他必要事項を審議し決定します。

(評議員会)

第12条 この会に、会の運営に関する重要事項を審議する評議員会をおくことができます。

2 評議員は会員総会において選出し、その任期は1年とします。

(会計監査)

第13条 この会に、2名の会計監査をおきます。

2 会計監査は会員総会において選出し、その任期は1年とします。

第5章 組織

第14条 この会に地域グループをおきます。

2 地域グループは、地域単位とします。

3 地域グループは大学図書館研究会の目的を達成するために必要な事業をおこないます。

4 地域グループに関する会則は地域グループで定めます。

第14条の2 この会に研究グループをおきます。

2 研究グループは、研究テーマごとに会員が自発的にグループを形成し、申請することによって設置されます。

3 研究グループは、設定された研究テーマに応じた研究活動をおこないます。

4 研究グループは、長期的な研究活動を行う長期的研究グループと新規的・短期的研究活動を行う萌芽的研究グループがあります。

5 研究グループに関する会則は研究グループで定めます。

第6章 財政

第15条 この会の経費は会費、事業収入および寄付金でまかない、会員は会費として年額5,000円を前納しなければなりません。

2 この会の予算、決算に関することは会員総会に提案し、その議決を得なければなりません。

3 全国委員会は会員の要求のあるときは、その都度会計簿を見せなければなりません。

4 この会の会計年度は7月1日から始まり、翌年6月30日に終わります。

第7章 細則

第16条 この会則の変更は会員総会においてのみなされ、出席会員の3分の2以上の賛成を必要とします。

第17条 この会則は1970年10月25日より効力を発するものとします。

附則

この会則は、2014年8月23日から施行する。

附則

この会則は、2016年8月27日から施行する。

附則

この会則は、2021年9月18日から施行し、改正後の第1条の規定は2021年1月1日から適用する。

改正 1973年9月25日
 1976年8月2日
 1977年8月2日
 1992年8月24日
 1994年8月27日
 2014年8月23日
 2016年8月27日
 2021年9月18日
 2022年9月17日

大学図書館研究会会則改定（案）新旧対照表

改正案	現行
第1章（変更なし）	第1章 名称
第2章（変更なし）	第2章 目的および事業
第3章（変更なし）	第3章 会員
第4章 運営	第4章 運営
<p><u>(会長)【第12条から一部修正の上、移動】</u> 第7条 会長はこの会を代表し、会務を主宰します。会員総会、全国委員会、評議員会を招集します。会長の任期は1年とし、再任をさまたげません。</p> <p>2 全国委員会に副会長をおくことができます。副会長は、全国委員のうちから会長が指名します。</p>	
<p><u>(全国委員会)【第9条から一部修正の上、移動】</u> 第8条 この会に会長1名を含む委員15名以上30名以内からなる全国委員会をおき、会務を担当します。</p> <p>2 全国委員会は、会長が招集し開かれます。</p>	

現行	改正案
<p>3 全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は会長を互選します。</p> <p>4 全国委員は会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。</p> <p>5 全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。</p> <p>(常任委員会)【第10条から移動】</p> <p>第9条 全国委員会に若干名の委員による常任委員会をおき、通常の会務を担当します。</p> <p>2 常任委員会は、会長が招集し開かれます。</p> <p>3 常任委員は通常の会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。</p> <p>4 常任委員会に特定常任委員をおくことができます。特定常任委員は特定の通常会務を分担し、常任委員会および全国委員会に出席する義務を負いません。</p> <p>5 常任委員会に事務局をおきます。</p> <p>(会員総会)【第7条から繰り下げ】</p> <p>第10条 (変更なし)</p> <p>第11条 (第1項変更なし)</p> <p>2 会員総会の開催はその日から30日以前に提出議案を明記した文書をもって、全会員に通知しなければなりません。さらに都合により出席できない会員の意見も会員総会に反映するよう努めなければなりません。</p> <p>3 (変更なし)</p> <p>(全国委員会)【削除、第8条へ移動】</p>	<p>改正案</p> <p>(会員総会)</p> <p>第7条 この会の最高機関を会員総会とし、会員はすべてこの会員総会に出席し、発言し、議決に加わる権利を有します。</p> <p>第8条 会員総会は年1回会長が招集し開かれます。ただし、全国委員会が必要としたとき、もしくは会員の3分の1以上の要求があるときは臨時に会員総会を開くことができます。</p> <p>2 会員総会の開催はその日より30日以前に提出議案を明記した文書をもって、全会員に通知しなければなりません。さらに都合により出席できない会員の意見も会員総会に反映するよう努めなければなりません。</p> <p>3 会員総会は活動方針、予算、決算、役員を選出およびその他必要事項を審議し決定します。</p> <p>(全国委員会)</p>

現行	改正案
<p>(<u>常任委員会</u>)【削除、第9条へ移動】</p> <p>(<u>評議員会</u>) 第12条 (変更なし)</p> <p>(<u>会長</u>)【削除、第7条へ移動】</p> <p>(<u>会計監査</u>) 第13条 (変更なし)</p>	<p>第9条 この会に会長1名を含む委員15名以上30名以内からなる<u>全国委員会をおき、会務を担当します。</u></p> <p>2 <u>全国委員は会員総会において選出し、選出された委員は会長を互選します。</u></p> <p>3 <u>全国委員は会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。</u></p> <p>4 <u>全国委員会は委員の過半数の出席により成立し、議決は出席委員の3分の2以上の賛成を必要とします。</u></p> <p>(<u>常任委員会</u>) 第10条 <u>全国委員会に若干名の委員による常任委員会をおき、通常の会務を担当します。</u></p> <p>2 <u>常任委員は通常の会務を分担し、その任期は1年とし再任をさまたげません。</u></p> <p>3 <u>常任委員会に特定常任委員をおくことができます。特定常任委員は特定の通常会務を分担し、常任委員会および全国委員会に出席する義務を負いません。</u></p> <p>4 <u>常任委員会に事務局をおきます。</u></p> <p>(<u>評議員会</u>) 第11条 この会に、会の運営に関する重要事項を審議する<u>評議員会をおくことができます。</u></p> <p>2 <u>評議員は会員総会において選出し、その任期は1年とします。</u></p> <p>(<u>会長</u>) 第12条 <u>会長はこの会を代表し、会務を主宰し、会員総会、全国委員会、評議員会を招集します。会長の任期は1年とし再任をさまたげません。</u></p> <p>2 <u>全国委員会に副会長をおくことができます。副会長は、全国委員のうちから会長が指名します。</u></p> <p>(<u>会計監査</u>) 第13条 この会に、2名の<u>会計監査をおきます。</u></p>

現行	改正案
<p>第5章 (変更なし)</p> <p>第6章 財政</p> <p>第16条 (第1項から第3項まで変更なし)</p> <p>4 この会の会計年度は7月1日からはじまり、翌年6月30日に終わります。</p> <p>第7章 細則</p> <p>第17条 (変更なし)</p> <p>第18条 この会則は1970年10月25日から効力を発するものとします。</p> <p>附則 (変更なし)</p> <p>附則 (変更なし)</p> <p>附則 この会則は、2021年9月18日から施行し、<u>改正後の第1条の規定は2021年1月1日から適用する。</u></p> <p>改正 1973年9月25日 1976年8月2日 1977年8月2日</p>	<p>2 会計監査は会員総会において選出し、その任期は1年とします。</p> <p>第5章 組織</p> <p>第6章 財政</p> <p>第16条 この会の経費は会費、事業収入および寄付金でまかない、会員は会費として年額5,000円を前納しなければなりません。</p> <p>2 この会の予算、決算に関することは会員総会に提案し、その議決を得なければなりません。</p> <p>3 全国委員会は会員の要求のあるときは、その都度会計簿を見せなければなりません。</p> <p>4 この会の会計年度は7月1日よりはじまり、翌年6月30日に終わります。</p> <p>第7章 細則</p> <p>第17条 この会則の変更は会員総会においてのみなされ、出席会員の3分の2以上の賛成を必要とします。</p> <p>第18条 この会則は1970年10月25日より効力を発するものとします。</p> <p>附則 この会則は、2014年8月23日から施行する。</p> <p>附則 この会則は、2016年8月27日から施行する。</p> <p>附則 この会則は、2021年1月1日から<u>施行する。</u></p> <p>改正 1973年9月25日 1976年8月2日 1977年8月2日</p>

現行	改正案
1992年8月24日	1992年8月24日
1994年8月27日	1994年8月27日
2014年8月23日	2014年8月23日
2016年8月27日	2016年8月27日
2021年9月18日	2021年9月18日
2022年9月17日	

大学図書館研究会出版物の取扱い（案）

大学図書館研究会出版物の、図書館や書店等の団体（以下、団体）への販売を委託するにあたり、販売の継続そのものや手続きについて再検討する必要があります。

このことについて、2021/2022年度第2回全国委員会（2021年12月19日（日）開催）及び同年度第3回全国委員会（2022年3月21日（月祝）開催）にて審議した結果を記しますので、ご審議をお願い申し上げます。

1. 出版物頒布に関する現状

2020年10月10日（土）に開催された第51回全国大会の会員総会で審議した結果、会報『大学の図書館』（以下、会報）の取扱いについて、2021年1月より、以下のように変更しました。

- ① 会員へのデジタル版頒布に伴い、会員への紙版の送付を停止する
紙版が必要な場合は、別途発注の必要あり（有償頒布）
- ② 非会員へのデジタル版頒布、紙版頒布は実施しない
- ③ 団体へは、紙版のみ販売し、デジタル版の販売は行わない

種別		紙版	デジタル版
個人	会員	有償頒布	無償頒布
	非会員	×	×
団体		有償頒布	×

2. 全国委員会での検討経緯と結果

団体への販売を委託するにあたり、過剰なコストをかけないためには、団体への出版物販売について再検討する必要があります。そこで、2021/2022年度第2回全国委員会において常任委員会より、出版物販売の見直し及び出版物販売の簡素化について、下記3案が提示されました。

- 案A
下記全てを満たす団体に限り、有償頒布する
 - 始期1月-終期12月
 - 前払い{もしくは/及び}後払い
- 案B
団体への有償頒布を停止する。
但し、保存を目的として、国立国会図書館など、納本や資料交換をしている団体（10団体以下）に無償頒布する
- 案C
団体への頒布をすべて停止する。

また、あわせて会誌の頒布方法についても提起がなされました。

この提起に対し、各グループに持ち帰り検討が行われ、その結果を2021/2022年度第3回全国委員会で審議した結果、2023年以降の販売方法について、会報については案Aの「前払い

及び後払い」で、また会誌については、発行後、即時オープンアクセスとすること（団体への販売は行わない）が承認されました。

参考

(1) 用語について

- 「前払い」とは、購読（契約）期間より前の請求書送付を指す
- 「後払い」とは、購読（契約）期間より後の請求書送付を指す

(2) 会報について（2022年7月末日現在）

- 有償頒布する総件数：152件
- 始期1月-終期12月及び前払い：106件
- 始期1月-終期12月及び後払い：34件

- 案A（「前払い及び後払い」）を選択することによって、販売対象外となると考えられる件数:12件

- 会報1部あたりの印刷コスト：単価：316.4円（税別、160部印刷した場合）

- 案Bの場合、必要経費は約48,000円/年
 - PDF納品のみの場合：384,000円/年
 - PDF納品＋10部印刷の場合：432,000円/年

以上

第53回全国大会 決算報告

【凡例】

- ・全ての表の単位は「円」である。
- ・差引額の「▲」は、マイナスであることを表す。

〈収入の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	収支
参加費	66,132	会員無料（要申込） @3,000*24名（非会員） うち23名分はPeatix手数料@5,658、振込手数料@210の合計@5,868を控除 @3,000*1名は直接大会口座に振込	82,410	会員無料（要申込） @3,000*30名（非会員） ※Peatix手数料（有料チケット分）：販売実績の4.9% + @99*枚 + 振込手数料@210として@7,590を控除	▲ 16,278
懇親会費	0	オンライン実施のため費用は不要	0	オンライン実施のため費用は不要	0
広告費	190,000	@10,000*13社、 @20,000*3社	160,000	@10,000*10社、 @20,000*3社	30,000
大会基金より繰入	100,000		100,000		0
合計	356,132		342,410		13,722

〈支出の部〉

費目	決算額	決算備考	予算額	予算備考	収支
会場費	16,170	Zoom Proライセンス 1ヶ月分@2,200*4ホスト 大規模オプション 1ヶ月分@7,370*1ホスト	16,170	Zoom Proライセンス 1ヶ月分@2,200*4ホスト、 大規模オプション 1ヶ月分@7,370*1ホスト	0
交流会費	0	オンラインで実施	0	Zoom以外のサービスを利用する場合はここから支出	0
機器費	0		0		0
印刷費	3,420	会報封入大会チラシ印刷費、会報封入費	4,000	会報封入大会チラシ印刷費	580
オンライン接続準備費用	65,000	記念講演講師分として @20,000*1名 分科会講師分として @5,000*1名 シンポジウム講演講師分として@20,000*2名	75,000	記念講演講師分として @20,000*1名 分科会講師分として @5,000*3名 シンポジウム講演講師分として@20,000*2名	10,000
消耗品費	0	文房具購入費用	3,000	文房具購入費用	3,000
通信費	2,444	協賛企業宛会報送料、参加費請求書類送料	4,000	協賛企業宛書類郵送費用ほか	1,556
予稿集作成費	0	PDF(内製)で発行	30,000	PDFでの発行予定。 外注した場合の費用。	30,000
実行委員会費	27,258	実行委員の諸費用 ・Backlogスタータープラン料金(2022/07/15-2023/07/14)として@26,400 ・配布資料設置用Microsoft365ライセンス1ヶ月分として@858	30,000	実行委員の諸費用 Backlogスタータープラン料金(2022/07/15-2023/07/14)として@26,400	2,742
予備費	825	振込手数料	80,240	振込手数料はここに含める	79,415
大会基金戻入	100,000		100,000		0
小計	215,117		342,410		127,293
一般財政繰入	141,015		0		
合計	356,132		342,410		

第53回全国大会 運営役員名簿

実行委員長：

山口友里子(東京地域グループ・一橋大学)

副実行委員長：

赤澤久弥(京都地域グループ・大阪大学)

事務局長：

上村 順一(東京地域グループ・国立情報学研究所)

委員：

小林 和実(東京地域グループ・東京立大学)

澤木 恵(東京地域グループ・東京海洋大学)

下城 陽介(東京地域グループ・東京大学)

高瀬 洋子(東京地域グループ・専修大学)

中島 慶子(東海地域グループ・豊橋創造大学)

松川 隆弘(大阪地域グループ・大阪商業大学)

松原 恵(東京地域グループ・国立情報学研究所)

山下真佑美(広島地域グループ・広島大学)

渡邊 伸彦(京都地域グループ・京都大学)

和知 剛(郡山女子大学短期大学部・

郡山女子大学図書館)

第53回全国大会 参加申込者名簿

相澤 裕介 (学術基盤整備)	小林 明博 (大阪)	西 菌 由依 (九州)
相場 洋子 (グループ無所属)	小林 和実 (東京)	野田 ひかる (京都)
青山 史絵 (東京)	小林 康隆 (東京)	野間口 真裕 (京都・学術基盤整備)
赤澤 久弥 (京都)	小林 泰名 (北海道)	野村 健 (東京)
有田 真理子 (広島・九州)	駒崎 知永理 (東京)	野村 知子 (非会員)
有馬 良一 (兵庫)	小村 愛美 (大阪)	花崎 佳代子 (兵庫)
安東 正玄 (京都)	小山 荘太郎 (東海・京都・大阪・兵庫)	林 恵理 (東京)
伊賀 由紀子 (大阪)	酒井 由紀子 (非会員)	原田 佳子 (九州)
石川 知子 (九州)	坂本 里栄 (九州)	日高 正太郎 (非会員)
石崎 伸江 (非会員)	佐藤 くにこ (非会員)	平山 紀子 (九州)
石立 裕子 (東京)	佐藤 知生 (グループ無所属)	福嶋 涼 (京都)
石津 朋之 (東京)	佐藤 正恵 (千葉)	藤倉 恵一 (埼玉)
磯崎 みつよ (東京)	佐藤 八千代 (非会員)	ふじた まさえ (非会員)
磯本 善男 (北海道)	佐藤 恵 (東京・学術基盤整備)	藤原 純子 (非会員)
市村 省二 (東京)	澤木 恵 (東京・学術基盤整備)	堀越 香織 (グループ無所属)
井上 昌彦 (兵庫)	嶋田 学 (グループ無所属)	前川 敦子 (大阪)
今野 創祐 (京都)	下城 陽介 (東京)	牧田 由江 (グループ無所属)
今原 千波 (大阪)	下山 朋幸 (東京・学術基盤整備)	松川 隆弘 (大阪)
岩井 雅史 (グループ無所属)	諏訪 敏幸 (大阪)	松田 繭 (非会員)
上村 順一 (東京・学術基盤整備)	諏訪 有香 (広島・学術基盤整備)	松野 高德 (東海・学術基盤整備)
牛島 千穂 (千葉・東京)	関戸 麻衣 (非会員)	松原 恵 (東京)
遠藤 直子 (グループ無所属)	高久 雅生 (非会員)	宮澤 豊和 (非会員)
大谷 裕 (東京)	高橋 明日翔 (グループ無所属)	宮丸 由美子 (九州)
岡田 大輔 (非会員)	高橋 菜奈子 (東京)	六車 彩都子 (兵庫)
小川 ゆきえ (九州)	高橋 風吉 (東京)	村岡 和彦 (兵庫)
小野 未来子 (九州)	立原 ゆり (東京)	森 敬洋 (京都)
小野 亘 (東京)	棚次 英美 (大阪)	森 藤恵子 (兵庫)
折井 匡 (非会員)	田辺 浩介 (東京・学術基盤整備)	山上 朋宏 (京都)
加川 みどり (兵庫・学術基盤整備)	千葉 まこと (東京)	山口 和美 (東京)
柿原 友紀 (九州)	辻 佳代 (九州)	山口 真也 (非会員)
楫 幸子 (広島・学術基盤整備)	土出 郁子 (大阪・学術基盤整備)	山口 友里子 (東京)
片山 智恵美 (広島)	寺島 陽子 (大阪)	山崎 圭 (東京)
加藤 晃一 (千葉)	寺升 夕希 (京都)	山下 大輔 (九州)
加藤 信哉 (グループ無所属)	徳田 恵里 (兵庫)	山下 真佑美 (広島)
川崎 陽奈 (九州)	常世田 良 (京都)	山下 ユミ (京都)
北川 正路 (東京)	戸田 あきら (グループ無所属)	山田 奈々 (京都)
北川 妥穂 (埼玉)	呑海 沙織 (東京)	山田 美雪 (グループ無所属)
木内 公一郎 (東京)	中川 恵理子 (東海)	吉井 悦子 (大阪)
木村 光 (京都)	中筋 知恵 (北海道)	吉田 弥生 (大阪)
久保山 健 (大阪)	永利 和則 (九州)	渡邊 さよ (広島)
桑原 博文 (九州)	南雲 知也 (東京)	渡邊 伸彦 (京都)
河野 由香里 (北海道)		和知 剛 (学術基盤整備)
小陳 左和子 (非会員)		

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax : (044) 989-2250 E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

お詫びと訂正 『大学の図書館』2022年10月号

以下のとおり、誤りがありました。お詫び申し上げますとともに、訂正いたします。

150頁1行目

(誤)「2022年9月17日(土)から20日(月・祝)までの3日間」

→(正)「2022年9月17日(土)から19日(月・祝)までの3日間」

154頁右段1行目

(誤)「第53回大学図書館問題研究会オンライン大会に参加しました」

→(正)「第53回大学図書館研究会オンライン大会に参加しました」

154頁右 17行目～18行目

(誤)「ファシリテーターおかげで、」

→(正)「ファシリテーターのおかげで、」

155頁右段12行目～13行目

(誤)「若手へのしお寄せが運営委員メンバー内でも謙虚にみられ、」

→(正)「若手へのしお寄せが運営委員メンバー内でも顕著にみられ、」

162頁左段4行目、14行目

(誤)「記念公演」 → (正)「記念講演」

2022/2023年度 運営サポート会員を募集します

常任委員会

本年度も、会務をサポートする運営サポート会員を募集いたします。我こそは、と思う会員のみならず、問合せ先までご連絡をお願い申し上げます。なお、諸般の事情で、お申し出に沿えない場合もありますので、ご了承ください。今回募集するのは、以下の委員会です。

- ・研究企画委員会
- ・会報編集委員会
- ・会誌編集委員会
- ・広報委員会
- ・記念出版物編集委員会
- ・事務局出版担当
- ・事務局組織担当

業務の内容は、お問合せくださった方に、常任委員の担当からご連絡いたします。

【問合せ先】大学図書館研究会事務局 dtk_office@daitoken.com